
パンデミック（完全版）

京谷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パンデミック（完全版）

【Zマーク】

Z1085Z

【作者名】

京谷

【あらすじ】

ある日世界は突如著しい変化を起こした。
それはいい変化ではなく、破滅への第一歩。
そんなことはまるで知らない日本のある街に住んでいた男
「笹塚京谷」はいつものように口課の昼寝をしようとしていた・・・

世界が変わった日（前書き）

突然ですが本当に申し訳ありません。

この「パンデミック」という名を使って作品を出すのは三回目で、
そのうちの一回は失敗してしまいました。

ところのも、一回目は連載物なのに短編として出してしまったので
没。

一回目は一話目を入れ忘れてしまったので失敗というバカなミスで
没。

というわけでこれが完全版です。
視聴者の皆様、本当にmん独裁やり方にしてしまい申し訳ありません。

世界が変わった日

「あー寝起きねえじゃねえか。」

自室で愚痴つてるのは、篠塚京谷。

「日曜日だつてのに外がうるさくて寝れやしねえよ」

「祭りでもやつてんのかあ？」

カーテンを開けてみた。

「あああ？」

目に飛び込んできたのは、今までやつたことのあるゲームのような光景だった。

「人が人を襲つてんのか！？」

「…?」

襲われている人を中心にして真っ赤な海ができ始めた。

「血だよな…・・あれ」

（「のめめじやまざい! 助けなきややべえよ。」）

部屋にあつたバットを手にし部屋から飛び出した。

家から出ると状況の悪さが一瞬でわかった。

飛び交う声は悲鳴だけ、道路に投げ捨てられている車の中には燃えてこるものまであった。

「なんだよ? 朝はこりなんじゃなかつたぞ!」

（とにかく助けなくては）

京谷は襲われている人に向つて走り出した。

（以外に距離があつたんだなあ・・・）

京谷は人命救助をしようと道を爆走中、バットを片手に持つて。

普段なら今の笹塚の恰好を見れば悲鳴の一つでも上がつたかもしないが、

悲鳴はもう充分なくらいに至るところから聞こえていた。

「よつやく着いた。」

一人の人間に群がる人間。いじめの瞬間を見ているみたいで少し頭に血が昇る。

「おい！なにやつてんだ。いい大人が多勢に無勢とはよ！」

「ウウウウウウウウウ」

「あ？聞こえねえよ。とにかくそこから離れろ。」

「ウウウウブチツウウウ」

「おこー向かってんだ、お前ひー」

京谷は自分が無視されていることで若干切れ始めていた。

「おこ・・・いい加減離れねえといこつでブン殴るぞー。」

「ウウウウウウウ」

「警告はしたからな。くそ野郎ー。」

(こいつだー)

ドボッシュ

フルスイングが奴の背中にヒットした。

世界が変わった日（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございました！

救出

彼はこんな異常事態が起きてくると、つい口元に笑みを浮かべていた。

(や・・・やべ。楽しくなつてきた!)

あれからしばらく奴の体中をバットで殴っていたが、奴は根気よく何度も立ち上がってくる。

(まさか人を堂々と殴れる日が来るなんてよ・・・楽しくなつちゃうよなあ!)

ゴッ!

頭にフルスイングがヒットした。

ドサ

「あー」

バットで小突いてみたが、もう立ち上がる事はない。

(死なない訳じゃないのか。)

「どうすんだよ・・・」

(襲いかかっていたからといって、殺すのはまずいよなあ……)

そこで事態は急変した。

「おーあんたー」「フッ」「ホ」

「ん?」

襲われていたやつだ。

「こいつらを殺すことここで躊躇なんていうないー」「ホッ」「ホッ」

(何言つてんだこいつ……)

「こいつらはもう俺たち人間とは違うんだ!」

「はあ?」

「何が起きたのか、俺も詳しくは知らんが、とにかく奴等は俺たちとは違うんだ!」

「信じると？」

「あいつらの異常たば殴つて殺したあんたが一番よくわかっている
だろ？！」ホッガフツ

（確かにそうか。）

「まあどうあえずあんたを助けるよ。」

「駄目だ・・・俺は噛まれた。」

「何ゲームみたいな」と言つてんだよー確かに血はかなり出てるが
意識もしつかりして・・・」

「俺もあと何分かしたらさつきの奴みたいになる。」

「一。」

「まさか本当にゲームみたいなことが・・・」

「たぶんな。俺は見たんだ……噛まれた奴がどうなるか。」

「だからってよーーー！」

「いいからいけ……あんたみたいな勇氣のある奴を待ってる人はまだいるはずだ！」

「くそ！本当に助ける方法はないのか？』

「ない。『フツフツ』

「わかつたらせわせつと行け！俺が奴らみたいになる前に……」

「…………わかつた。」

「それでいいんだ。」

あれから京谷は一度家に帰つて、身支度を整えたこととした。

「やつと着こな。」

(家に帰つてくる途中はあまり「アレ」は見かけなかつたな。)

「まずは飲料水か。次は食糧だろ。後は……」

家にある使えそうなものはとりあえずカバンに入れた。
武器はバットのままである。

「どうあえずこんなもんか。」

(あとは……)

「母さん行つてくるよ。精々おれが死なないよう上から祈つていって
くれ。」

京谷は和室の仏壇の前で手を合わせる。
母は一年前に他界した。
不慮の事故であった。

(今はしんみりしている暇なんてないか……)

「よしこいかー！」

ガチャ

家のドアを開けたら数メートル先に「アレ」がいた。

(ッーー)

あまいの驚きに声も出せなこまま硬直してしまった。

(・・・アレ? 襲つてこない?)

「 おやか見えてないのか? 」

試しに玄関にあつた靴べらを道路のまづへ投げてみた。

「 ジン・・・

小さな音が鳴つた。

その瞬間田の前にいた「アレ」はゆっくつと体の向きを変へ、道路のまづへ向かつていった。

(やつぱりうなのかー)

「 これでこちこち殴りなくとも進めるー 」

声を出しすぎた。

道路へ向かつて行つてていた「アレ」がまた戻ってきた。

「ツチー。」

ゴアン

デサ

一発K・Oだ。

(まだ数が少ないからいいが都市部へ行くともうとこるんだらうな
あ)

「さて『氣を取り直して行きますか。』

そつまつて京谷は家を後にした。

救出（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございました！

出会い

家を出てから早いことにもう一時間が過ぎた。

「誰もいねえじゃん・・・」

自分の家の周りや、商店街なども言つてみたが、皆避難したのか、「人」はまるで見当たらなかつた。

「皆「アレ」になつちまつたのかよ!...?」

商店街を埋め尽くすのは「アレ」の群ればかり。
助けをほしがつている人なんてだれ一人見当たらなかつた。

(場所を変えるか・・・)

「ちょっと街に近づいたほうがいいのかなあ。」

(街に近づけば人もいるだろうがそれは「アレ」が増えることも意味するんだよなあ)

「はあ~」

「今日はゆっくり寝して夜を迎えようとしたのよ。」

また、声を出しすぎてしまった。

(あ・・ヤベ・・・・)

「ウウウウウウウウ

「へモッ

(また走るか!)

と思った時だつた。

遠くから一際大きな叫び声が届いた。

「ちょっとーだれかいないのー?変態が溢れてるんだけど。」

(馬鹿かあいつーあんな大声出しゃがつて!)

「ちよっと待つてろーーー今行くぜ。」

女子を馬鹿にしながら自分も大声を出す馬鹿な京谷である。

「わー？ちょっとあんた何？バットなんか持つて。」

「お前周りの状況が見えてねえのかよー？」

「変態が増えただけでしょ？」

「・・・・・・・・・・・・

「なによ。」

「お前・・・馬鹿だろ。」

「ツー？」

「ちよ・・ちよっと！初対面の女子に向かってバカって・・・あんたこそ馬鹿じやない？」

「はあー？俺はお前ほど馬鹿じや・・・」

「ウウウウウウウウ」

(やべー忘れてた。)

「おこー茶番はここからとにかく逃げなさい。」

「茶番ついで・・・ちが・・・ちょっとアガリニベのよ。」

「聞いえてなかつたのか馬鹿が、逃げるんだよ」

「馬鹿ついで・・・まああいこわ。で向所に逃げるのよ」

「とにかく走る。」

「あそたせっぱと馬鹿でしほ。」

「うめかべーいいかりこべー。」

「うめかべーと待つべー。」

いつして京谷と馬鹿（名前教えてもらつてないので）は一時的にチームを組むことになった

出合い（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございました！

頼れるものはない

「「まあまあまあまあ」」

どれくらい走ったんだろう?

辺りの景色は普段あまり見ないものへと変わっていた。

「「これは何だ?」」

「確かに近所には警察署があったはずよ。」

「お前詳しそうな。」

「趣味が散歩なの。この街の地理はまかせてよ。」

「へえ~」

(ただのバカじゃないのか)

「やつこやお前名前は?」

「山岡美咲」

「俺は笹塚京谷だ。」

「で、これからどうするんだって？」

「そつもさあ、たゞ近のまでは警察署があるの。」

「で？」

「でって・・助けを求めるときまつてしょー。」

「この急な異常事態に警察が俺たちをわざわざかくまつてくれると
は思えんが・・・」

「だ・・だつて市民の安全を守るのが警察でしょーなう・・・」

「わかった。じゃあ一度行ってみよう。ただ受け入れを拒否された
ら次は俺の指示に従つてもらひからな。」

「わかったわ。」

「じゃあ早速行きましょう。」

結果は京谷の予想通りだった。

警察の方も迷つていたみたいだが、やはりこれ以上不安因数は増やしたくなかったらしい。

実際に大人の対応だ、と思ったがやつてくる「アレ」に向かって無駄に弾を打ち続いている様は少し残念だった。

「だから言つたろ。警察だつて俺たちと同じで自分の身を守るのがやつなんだ。」

「・・・・・

「まあいい。とにかくさつさつとおつ次は俺の言ったところに行くからなー。」

「わかってるわよ！」「で、どこに行きたいの？」

「ホームセンターだ。」

「なんだ？』

「なんどって、武器の店だ。ホームセンターって

「あんな材木と工具とかぱりかつの場所でござりますのよ。」

「武器を作るんだよ。バットだけじゃ心細いからな。」

「作るってあんたねえ、子供の工作じゃないのよ。武器を作るのは
ことだ。」

「こやとなつたらチョンソードも持り出すよ。」

「ここれから早く行げ。もつとも口も暮れてくれない。早めに
こつて今日の寝床も確保するだ。」

「こやとなつたら、野宿でもあるつもつ。」

「こやとなつたらな。」

「私は帰るわよ。お風呂だつて入りたいし。」

「我がまま言うなよ。こんな状況でいちいち家に帰つてられるかつてんだ。」

「だからつて野宿しうつてこいつの？」

「わかった。お前は高級な寝袋に入れてやるから勘弁してくれ。あと野宿すると決まつたわけじやないから。」

「私がそんなもので釣られるとでも？つておに聞けよ！わかったわよ。わかりました！ついていきますよー。ビツセ家にはだれもいないし。」

「やつと決まれば急ぐぞ。日暮は近いからな。」

「ホームセンターならそこから近い所に大きいやつが一つあるわ。そこに行きましたよ。」

「おひー。」

そうして京谷と美咲は歩き出した。

新たな真実

あれからじばらく歩いていたが、だんだんと「アレ」が増えてきている気がする。

時間とともに歯まれた人が増えていったのだろう。

または、自分たちが都市部に近付いているのかも知れない。

「あれよ。」

「確かにでかいなあ・・・」

「IJの街一番だからね。」

「とりあえず入るか。」

「ええ。」

中はとても広く、物も沢山あった。

木材、工具、観葉植物、隅の方にはスナック菓子や少量の飲料水、その他いろいろなものがあった。

ただ、明らかにおかしなところがある。それは客と店員がないということだ。

たぶん逃げ出したか「アレ」になつて音のする方へ向かつたのだと

う。

「中もかくこんだなあ。なんでもあるさ、じゅねえか?」

「んがわ。じゃ早速使えそつなものでも集めましょ。」

「じゅあ手分けしよう。おれは右からぐるっと回って使えそつなものを持ってくる。」

「わかったわ。ただなんか護身用の武器とかがほじこんだだけビ・・・

」

「あ、そつか。じゃあこれを持つて行け。」
京谷はバットを渡す。

「あっがとう。でもあんたは?」

「あへへひきかひ適当に拾つてあへへ」

「んが

「じゃあ行きますか！」

「うん。」

二人揃って買い物かご押して自動ドアをくぐり左右に別れた。

京谷は品眺め、

（まずは適当に使えそうなものは全部持つてくか）

と考えていた。

その頃美咲は・・・

「あーー！これ超いいじゃんーー！」

と言いつつ手に取った鉄パイプの近くには
「あくまでも工業用ですので、振り回して遊ばないでください」と看板が立ててある。

「今じゃ鉄パイプも生き残るための道具なんだよね・・・」

それからじぱらぐれち一人は合流した。

「俺はどこかくたくさん持つてきた。」

「私は殴ることに使えるやつばかりよ。」

ここから選別が始まった。

まずは自分の身を守れるものから選んでいった。

肘・膝に付けるプロテクター。以外にこういうものもあるもんだ。
あとグローブ。普通のバットティングのときなどに使うものだ。
思いつきバットを振っても手から滑り落ちること無くなるので、
無いよりはいいだろ？。

「ホームセンターってすげいな。」

「え・ええ。そうね、私もびっくりしたわ。」

次は勿論武器だ。

バットはポリプロピレンをカーボンブラックで覆っているバットに
変更した。

ちなみにポリプロピレンとは、プラスチックの中では強度が高く、
水に浮かぶほど軽く対熱性にも優れたプラスチックである。
あと鉄パイプにバーなどを使うテープングを巻いたもの。
最後にチェンソーだ。

「バットや鉄パイプならまだ分かるけど、あんたチェンソーなんて扱えるの？」

「説明書とかあるだろ」

「これって展示品でしょ？説明書は付いてくるのは倉庫にある箱付
もじやなきやないわよー！」

「大体はこんな感じだろ？」

京谷はチェンソーの近くに置いておいたあつた農機具用つと書いて
ある燃料をタンクに入れ始めた。

「ちょ・・ちょっと！？大丈夫なの？」

「確か大丈夫だ。あとは・・・」

今度はさつき開けたタンクじゃない方の蓋を開け、チェンソーオイ
ルと書かれたものを入れた。

そのあと何か細々と操作した後に

「これでいいはずだッ！」

と黙つて京谷は思いつきリスタートハンドルを引いた。
すると、

ポン、ポン

と軽い爆発みたいな音が鳴つた。
また京谷が細々とした操作をしたら、ゆっくりとチエンソーの刃が動き始めた。

「よしー！」

「あんた何で知つてんのーー？」

「昔親父から教えてもらつたんだ。」

「あなたの親はアウトドア好きなの？」

「親父が自衛官なんだ。」

「はあーー？」

「なら助けを求めるばいいじゃなー。」

「でもたらやつしゆよ。」

「？」

「親父が所属してるのは〇〇〇駐屯地で、ここからかなり離れているんだ。」

「なら電話してもらひればいいじゃない。」

「この状況がこじだけってわけじゃないんだ。さつき店にあったテレビで流された映像を見る限りこれは世界規模らしい……」

「そんな……」

「だからさつと親父も今頃対応に大忙しだと思う。だからさつちてしろ俺達は自分たちの力で生き残らなければならないんだ。」

「……」

「わかつたら準備しろ。やつせじでねが。戦には避けたが店の中に
も数匹「アレ」がいる。」

「今度はどこに行くのよ。」

「移動手段として車を手に入れたいんだ。」

「盗むの?」

「むづ俺たちは盗みをやつたんだ。今更なんだ?」

「いや車は鍵が掛つてる可能性があるじゃない?そういう時は必ずいつ
あるの?」

「だから俺たちが次に行く場所は鍵も一緒に手に入る場所だ。」

「車販売店だ。」

「ビリよっ。」

「その手があったわね。」

「普通盗むより早く車販売店に行く」とを考えないか?まあこれからやるのは結局盗みなんだがな・・・」

「ソレから近いのは中古車販売店ね。」

「おー運が良ければ大人数乗れる車両が手に入るかもしれないな。」

「じゃ行きましょうか。もう日も暮れるし。」

「やうだな。」

「てか結局武器作りはやらなかつたわね。」

「あ・・・わすれてた・・・」

こうして京谷と美咲は新たな装備も手にいれ次の目的地へ向かうのであった。

日暮れまであと一時間三十分

絶望と希望と絶望

京谷はチョンソーを振り回していた。

「こつたこび」から出でたのよー。」

「元から居たんだろー！俺たちが音を立てすぎたんだー！」

「早くここからでないと口が暮れちやうわー。」

「分かつてゐるー。」

数分前　　京谷たちがホームセンターから店舗へ向かったらそこには「アレ」が居て、出口をふさいでいた。どこから出てきたかは分らないが壁を作れるくらいの数はいた。その壁に京谷はチョンソーを食い込ませる。

ヴィイイングジャグジャグボトボト

チーンソーの音と肉が裂ける音、肉が地面に落ちる音がした。

「よしこれならいけるー。」

「ヴィイイイ・・・・・

(刃の回転速度が落ちてるー)

「くそー、チーンオイルが少なくなってきたか!」

さらに追い打ちをかけるように刃の間に血脂や肉、骨の破片などがたまつていぐ。

「こつはもうだめか! なまび・・・・

京谷は新しくなったバットを手に取る。

「美咲! バットだけじゃ一人で戦えない! 手伝ってくれ!」

「うんー!」

「ボン! ボンッベボン

(せつしみたくはいかないがこれならいけるー)

「ウウオオオウ！」

「ツーは・・・はなして・・・」

「美咲ツー！」

（くそツー！）れじゃあ間に合わねえ！）

ツターン！

ドチャ

「美咲！」

「だ・・大丈夫。それより一体誰が？」

「君たちの援護をする。」

聞きなれない声がした。

「あんたは誰だー?」

「警官だー。名前は加藤。」

「なぜー?」

「近くの警察署で籠城してたんだが、あれは奴らに占領されたんだー!」

(美咲が言つてた警察署か・・・)

「だがなぜー?」

「エリなし使えるものがたくさんあると困つてなー。」

「一応銃と弾はもてる限り持つてきたんだが、弾はいすれ切れるからね」

確かにその通りだ。

「ちょっとーー一人とも話していないでさつさと準備してまだ来てるわー！」

「じゃあ加藤さんー援護は頼みましたー！」

「ああー任せてくれー！」

ツターン ヴォガ！ ドゴッ！

ツターン ツターンツターン！

「はあはあ・・あと少しね。」

「ああ。 そうだな。」

「もうひと踏ん張りだー！」

ツターン　ツガ！　・・・・・

「お・・終わつたか。」

「そうみたいね。」

「よかつた。結構弾も使つたからね。」

「ありがとうございました。」

京谷はお礼をするため振り返つた。

(なんだ・・・加藤さんの後ろになんかいないか！？)

「ツー！ 加藤さん危ない！」

「？？」

京谷たちは不運なことに遠距離武器を持つていなかつた。

「アアアアアアアアアア・・・」

「加藤さんああん！」

京谷は走つたがバットを思いつきり振つて「アレ」を離そつとする
と、
どうしても加藤さんが邪魔になる。

グチャ・・・

加藤さんが首を噛まれて倒れこんだ。

その瞬間に襲つてきたやつの頭にフルスイングを叩き込んだ。

「加藤さん！」

「銃を持った大人が真つ先に死ぬなんて、馬鹿みたいだな・・・」

「ツチ！」

「なあに俺だつて噛まれた奴がどうなるかぐらい知ってるさ・・・仲間の死にざまを見てきたんだからな・・・」

「・・・」

「そんな顔しないでくれ・・・援護した甲斐がないじゃないか・・・」

「

「大丈夫けじめは自分でつける・・・少し目をそむけていてくれ・・・」

・

すうーはー

深呼吸の音が静かな店内に響く。

ツタアン・・・

「・・・」

「持てるものを持つてくぞ。美咲。」

「うん。」

「大丈夫か？」

「徐々に慣れていくなつたするわ・・・」

「もうか・・・」

それからは無言で加藤さんの所持品を漁つた。
手に入れたのは五発まで弾を装填できる拳銃を三つと弾を十五発く
らいだ。

後はどこの鍵かもわからない鍵だ。

たぶん加藤たちが籠つていた警察署で付き合ひの鍵だろう。

「銃はできるだけ使うな。音もでかいし、素人の俺たちじゃ遠くか
ら頭へ当てるのは難しいだろ？」「

「こちとこいつ時につていつわけね。」

「ああ」

「じゃ・・じゃあ行きましょ？ 中古車売り場へ

「案内は頼んだ。」

ようやく本来の目的に向かつて進み始めた京谷たちは
ホームセンターを後にした・・・

つかの間の休憩

「おーい。こいつになつたら着くんだ? もう日が暮れちゃうぜ。」

「わかつてゐるわよーこれでも近道使つてゐる方なんだからー。」

ホームセンターを出てからもう一十分位経つていた。
美咲が近道を使つてくれているおかげか大通りとかよりは
「アレ」はあまり見なかつたが、それでも一匹や二匹はやはりいた。
だがこいつらは無駄な音を出さなければ襲つてこない。
楽なもんだ。

しかし状況は変わつた。

美咲が大声で「わかつてゐるわよーこれでも・・・・・」と叫んだから
だ。

しかも「アレ」の聴力がとてもよかつたのか、美咲の声がすぐかつ
たのかはわからないが、

大通りの方からも敵が迫つてきていた。

「お前なあ・・・」

「しょうがないでしょーあんたが馬鹿にするから熱くなつちやたの
よー。」

「おれは馬鹿にしてない。あとそれ以上馬鹿でかい声を出すな。」

「あんたねえー。」

「お前のそのでかい声があれば「アレ」の鼓膜もぶち破れるんじゃないか?」

「ツー?」

「わかつた、わかつた。俺が悪かつたよ。だからそれ以上大声出するな。」

「わかつたわよ。」

「とつあえず」の状況をどうにかするべ。

「ええ。でもビリヤって・・・」

いま自分たちがいるのは周りをコンクリートの壁に囲まれた一本道。前と後ろからは「アレ」が迫ってきている。残された道はただ一つ。

「壁を登るだ。」

「わかつた！」

初めに壁を登ったのは京谷。次に美咲だ。だが、美咲が登り始めた時にはもう「アレ」が美咲に向って手を伸ばしていた。

「美咲早くしろー。」

「わかつてるけどッ！足をつかまれちゃったのー！」

(まざいーーーー)

京谷はポケットをあわる。ポケットから出てきたのは夕日に晒されて黒光りする拳銃だ。

(「Jの距離ならー。」)

「美咲ちよつと我慢しろー。」

「えー？」

ツダーン！

ズチャア

ドサツ

腕に軽い衝撃が走る。

あたりに火薬っぽい臭いが漂う。

これが硝煙の臭いというものだろ？

「ツー？」

「すまない。これしかなかつたんだ。」

「え・・ええ別にいいわ。まだ耳がキーンってなってるけど怪我はないわ。」

「さあ掘まれ！次のやつがもう迫ってるー！」

「うんー。」

こうして京谷たちは難を逃れた。

降りたところは一階建ての民家だった。

「ねえ？ 今日はここで睡眠をとらない？」

「住んでる人が籠城してるかもしね。」

「ちょっと見てくるわ。」

「俺も行くよ。」

外から居間を覗き込む。

中にはだれもいない。

今度は玄関にまわってドアノブに手をかけた。

ガチャッ

「開いた！」

「じゃあ入るか。」

中は綺麗で、「アレ」に押し入られた形跡はない。
京谷たちはドアの鍵を閉めて部屋を探り始めた。

「まあは安全の確保だな。」

「まあは一階からこましまよひ。」

「一階の安全は確保できた。」

「一階は子供部屋だったんだが、明日（月曜日）に向けて宿題などをやっていた形跡がある。」

「ほんの数時間前まで普通の一戸だったのに・・・ビックリ

「やつだな。」

「だが今は悲しんでいる暇なんてない。まあは安全を確保して今日生き残ることに集中するんだ。」

「わかったわ。じゃあと下の階も見に行きまよひ。」

「一階も安全だつた。」

「窓の近くにテープルとかを寄せて強化しつひ。」

「ああ。」

「やうね。夜はどうしても無防備になるからね。」

かれこれ三十分近くもかけて窓の周りに物を置いた。（一階からも物を運んだからこんなにかかった。）

「じゃあ風呂でも入りながら服を洗濯するか。」

「洗濯してゐる間は何着ればいいの？」

「やうじら辺にあるものでも着てればいいだろ。」

「う・・・うん」

（洗濯機の音でやつらが寄つてきたりしないよなあ・・・）

と思いつつも洗濯を始めた。

「先に入つていいぞ。俺は見張つとくからよ。あとバリケードがちゃんとしてるかチェックとかもしなきやだめだしな。」

「じやあお先・・・」

(つこでに布団でも準備しとくか)

「確かに予備の布団は一階にあつたんだよな。」

階段を上る。

なんか足音が多い気がする。しかも足音が聞こえてくるのは自分の後ろからではなく前・・・つまり一階からだ。

「・・・」

バットを握る手に力が入る。

(「」で振り回せんのかなあ・・・)

後三段ぐらいで一階だ。

(よじー・いくか!)

「ウオオオオオオ!

「あああああああーー。」

(人?)

「許してください。許してください。僕は何もしていない。だから・
・・」

(この男はこの住人か?)

「おひあんた。」

「ひいいいーー!」

「いやひいいじやなくてさ、あんたこの住人か?」

「え?普通の人か。よかったです。ええそうです、ついさっきまでここ
で平凡に暮らしてました。」

「すまないな勝手に上がつて。一応確認したんだがまだ人がいるな
んで。」

「あ・・屋根裏部屋に隠れてたんです。窓の外を見たら変な奴があふれてたんで。」

(押し入られた形跡はなかつたけどな・・・血痕もなかつたし・・・まさか家族に置いてかれたのか?)

「あのそれでなんだが俺たち今日一田にこかくまつてくれないか?」

「いいんですけど、俺たちって?」

「ああ、下で今女が風呂に入ってるんだがそいつは仲間なんだ。」

「仲間を組んで立ち向かっているんですか?」

田を輝かせて男は聞いてくる。

「まああそんなどころうだ。」

(大体はこいつそつと動いてやつ過いじてるけどな・・・)

「ひとまずお礼をいっとくぜ。ありがと。風呂まで勝手に借りちゃって。」

「別にいいんですが下にいても大丈夫なんですか？」

「ああ、たぶん大丈夫だ。窓の近くにはバリケードをつくりたし、ドアの鍵もちゃんととしたしな。」

「ありがとうございますー」れで心おはなくトイレに行ける。

(そのために降りてきたのか。)

ダッダッダッ・・・・・

階段を降りて行った。

(さあてシ布団でも取りに行くか。あ、布団使つていいか聞いてねえや。まいこよな)

「きやあああああ

「うわあああああ

「ツー？」

(出会いてしまったか、あの女と…)

「まざいぞ！」

「さあああああ！助けてえーーー…殺されやうーーー！」

降りてみると美咲が恐ろしい形相でバットを振り回している。

「お・・おい美咲！」

「ブウン！」

(あ・・あぶねえ！)

「おい聞けつてー！」

京谷もバットを振る。

バットとバットがぶつかり合つた。

「オーン

とても不思議な音が大音量で響き渡つた。

手がびりびりする。

(美咲のやつなんて力でバットを振つてたんだ!?)

「ここにはこの住人だ!」

「一人で確認してた時は誰もいなかつたじゃない!」

「屋根裏部屋に隠れてたんだよ! 大体「アレ」だったら叫び声なんてあげねえだろ!」

「あ…それもそつね

「まあいい。俺は風呂に入るからけやんと謝つとけよ。」

「う・・うん」

「うして一日目は何とか乗り切った京谷たちは、明日は中古車店へ行くと決意した。

ちなみに屋根裏部屋に隠れていた男は少し漏らしてしまった。

理由はもちろん美咲が濡れた髪を振り回し、鬼の形相でブンブンバツトを振り回してきたからである。

新たな一步

「うんッ・・・」

京谷は大きく伸びをまる。

「朝か・・・」

壁に飾られてあつたアナログ時計に目をやると、時計の針はちょうど午前九時一十分を指していた。

美咲を起こそうと辺りを見渡す。すると隣に動く影があつたので、声をかける。

「おい美咲起きろーそろそろこへど。」

「んん・・・わかつたあ・・・」

美咲の声がしたのは京谷とはテーブルを挟んで置かれてる布団からだった。

「え? じゃあこれは?」

「あ～・・・あーおせとひいざれこます京谷さん、美咲さん。」

(びっくりしたあー)この間に俺の隣に布団を置いたんだ?)

「ま・・・まあいい。飯を済ませてしまつたと行ひづぜ。時間は大切だからな。」

「(一)御飯ですねー少々お待ちをー。」

(万能だなあー・・・まだ名前も知らないけど)

普段の朝ならまつと時間を使つて出発準備も、今日はとても早かつた。

男子の京谷ならまだしも、女子の美咲まで早かつた。
きっと知らないうちに体はこの状況に順応しようとしているんだろう。

そして京谷たちは乾いた服に着替え、バットを握りしめる。

「 まあ 行きますかー！」

「ええー。」

「あ・・・あのお・・自分もついて行つてもこいでしょうか？」

「別にいいけど自分の身を守れるものぐらにはあるんだうつなあ。」

「は・・・はいーちょっと待つててくださいー！」

四、五分が経つた。

「準備はばっちりですー。」

「 「お・・・おおー」」

二人揃つて声を上げる。

男が装備してきたのは明らかに自分たちのものより上等な装備ばかりだ。

唯一勝つべしとしたら京谷たちは銃を持ってくるところだけだ

るつ。

「そんな装備どこの手に入れたんだ？」

「ネット通販ですー！」

「その軍服もシールドみたいなやつもか？」

「ええ。最近は売ってるんですよ、こいつは実際に軍で使われていたものとかが。まあこのシールドは軍のものではないんですけど・・・」

「

「なぜ聞くんだ？」

「え？ま・・まあサバゲーが好きなんですか。僕。」

「それだけでこんな本格的に？」

「ええまあ。でもみんなこんな感じですよ。」

「と…とにかくあなたの名前は？」

「あ、そういえば自己紹介してませんでしたね。僕は霧島健斗です！」

「わかった。俺たちの名前はもつ知ってるんだよな？」

「はい！美咲さんに教えてもらいました！」

「そうか。後出る前に言つとくが、外では大きい声を出すな。「アレ」が寄つてくるからな。」

「…………」「アレ」？

「ああ。窓の外でうるさいていたやつらのことを俺たちはそう呼んでる。」

「わかりました。」

「じゃあこーぞ！ 美咲。 健斗！」

「はい！」

「うん！」

こいつして京谷たちは霧島の家を出た。
田指す場所はもちろん中古車店だ。

「健太。 まずはお前は自分の身を守る」ことに集中しろ。」

「はい。」

「美咲。 ここからならどれくらいだ？」

「田印がないからわからぬけど、昨日通っていた道の近くだから。
・・歩いて三十分、小走りで十五分～十分ってとこかしら。」

「わかった。 じゃあ小走りで行こいつ。」

「あんた走れんの？ バットと鉄パイプとその他いろいろを持つたま
までさあ？」

「なんなら僕が持りますよ。」

「いや大丈夫だ、大体昨日だってこれで走ってただろ？」「

ちなみに京谷は両手に武器を持っているのではなく、バットは右手に、鉄パイプはしょってるバックに縄でくくりつけている。ぱっと見はRPGなどに出てくる勇者を現代風にしたようなものだ。

「じゃあいぐぞ。できるだけ音は立てるな。少しくらい」「アレ」にばれても走れば戦わずには済むから、できるだけ戦うな。」

京谷たちは小走りを始めた。

途中で何度も敵に向かおつとする健斗を引きとめながら順調に進んでいった。

そして約十分後・・・

「ええ。もうよ。」

「ええ。もうよ。」

「な…何をするのですか？」リード。

「ああ言ひてなかつたな、健斗には。今から車を盗む、心の準備はできたか？」

「え…え…え…盗むつゝ今からですか？」

「当たり前だろ。」

「え…でも…」

「こんな状況なんだ。生あるひとに必死になれ。なあに怖がぬ」と
はないわ、いまじや警察もろくに機能していないしな。」

「わ…わかりました。」

「まあ今回で慣れるわ。」

「じゃあ行きましょ。」

「ああ。」

店内に入る。

中にはざつと見る限り五体くら」「アレ」がいる。

「じゃあ安全確保と行きますか。」

「ええ。」

「二人とも怖い・・・」

「あ、健斗は見ていいだけだいいだ。この数なら余裕だしな。まあおれたちが危なくなったら助けてくれ。」

そうこうと京谷は優しい笑みを浮かべて歩いて行つた。

オラア！ブンッ

ズシャア

フツー・ブンッ

ズシャア

京谷がわざりきよりも楽しそうな笑み浮かべて戻ってきた。

「ヒマイツー

「??」

「まあいいか。よしじやあ早速車の鍵でも探ししますか。」

「車を選んでからじやなくって?」

「鍵は一応全部持つていけばいいだろ。」

「じゃあ行くか。あ、そつだまだ敵がいるかもしれないから気は抜くな。」

店は一階建だったので、数分で全部の部屋を見ることができた。
怪しそうな場所は一つだけだった。

それは店長の部屋であろう場所に設置されていた箱だ。

鍵は南京錠で軽く締められていただけなので、バットか銃を使えば開くだらう。

「じゃあ開けるべ。」

「ええ。」

バットを振り下ろす。

ブウォン！

ガキイイン

ガシャ・・・

「あ・・開いた！」

「じゃあ次は車選びだが、外は中のようにいいかないだろ？から気をつけろ。」

「じゃあ行きましょ。」

「はい。」
「おひー。」

外は意外にも「アレ」の数は少なかつた。
しかも今から行く車置き場には見る限り一匹もない。
さつきはもつといた気がするがいつたいどこへ行つたのだろう?
とにかく今の京谷たちにはラッキーだった。

「少ないな…まあ好都合か。」

「気をつける。ぱつと見はいなくとも車の陰にいる可能性もあるからな。
と言つてゐるうちに一人は遠くまで進んでいた。

「聞いてねえや…・・・」

「さーてどの車にしようかしら。」

「大きい車にしましょ、うよ美咲さん。物もたくさん入れられるし寝れるし。」

「せつねえ、どれがいいかしら。」

いつたそばから「アレ」が陰から飛び出してきた。
二人の後ろから出てきたため二人は気付いていない。

「ツー？」

「おいツー！美咲！健斗！」

「「？」」

（くそツー！またあれを使うか！）

京谷はポケットから銃を取り出す。
標準を定める。

引き金に掛けた指に力を込める。

ターンツー！

頭を狙つて放たれた弾丸は「アレ」の肩に当たった。

（美咲たちに当たらなかつただけいい方か・・・）

「美咲ツー！健斗ツー！」

「ひりに振り返るといつてこる『アレ』に近付いてもう一度弾丸を放つ。

ツターン！

ドサ

今度はまくへいつたよいつだ。

「だいじょうぶかーっ！」

「ええ」

「はい」

「よかつた。氣をつかるよ。まだ陰に潜んでこらがもしれない。」

「はい。それよつて……でなんなんだ氣になる」とつて？

「それよつて……でなんなんだ氣になる」とつて？

「銃はまだありますか？」

「ああ。あるがそれがどうした？」

「できれば一丁譲つてもらいたいんですけど、ダメでしょうか？」

「あ・・・いいぜ。ほり」

京谷は健斗に銃と弾丸五発を渡した。

健斗はもはつた直後に銃に入ってる弾を数え始めた。

服装も軍服ということだけあって、雰囲気はまるで軍人だった。
自衛官を父に持つ京谷が言うのだから本当だろう。

「んじゃ車選びに戻りますか。」

それから数分後・・・

「これよくない？大きいし強そうだし。」

「といって美咲が目を止めた車はハマーという車だ。

細かい種類もあるようだがさすがにそこまではわからない。

「いいですね。」

「よしじやあこれの鍵はどれだ？」

「全部試しましょう。」

「時間がかかるな。」

「しょうがないわ。とにかくやりましょう。」

十分かかった。

「け・・・結構時間かかるのね・・・」

「だから言つただろ。でも鍵もわかつたんだ、さあ入るうづ。」

早速ハマーに荷物を積み始めた。

荷物というほどのものはないが一応車に積み込む。

結果車に入れられたのは京谷と健太の食料や飲料水、医療品などが詰め込まれたバックだけだった。そして運転席に京谷が乗り込む。

「あんた運転できるの?」

「映画みたいな技はできないが一般人並みにはできるぜ。」

そして全員が車に入つたことを//ハード確認すると京谷はアクセルを踏んだ。

「じゃこれからどうに行くの?人を助けるついでそいつ出す
覚えるわけじゃないし、ガソリンにも限りはあるしちゃん

「じゃ・・じゃあ〇〇〇〇〇駐屯地へ連れて行ってくれませんか?」

「助けてくれるかわからないぞ?」

「いいえ実はその駐屯地の近くに住んでる友達からの報告によると
内部感染が起つたそなんです。駐屯地内ですね」

「じゃ あなたが行く理由がないじゃ ないか。」

「……あるんだ。」

「なんだ？」

「武器ですよ。 Ｙ＼＼＼」

「でも、 内部感染が起つたんだから、 なぜ武器をもつて手に入れるんだ？ その前に入れるのか？ 中に」

「ええ。 セイセイも言つたんですが、 今は内部感染が起つてるのであそ」
「せ」
「だから入り口を守つてゐる兵士だつて今頃逃げてゐるか、 「アレ」 の餌になつたかのどちらかです。」

「なるほどな。」

（だけどそれは仮説であつて事実じゃない可能性も・・・）

「疑つてますね？証拠ならありますよ。友達が基地に侵入したときにすでに兵士の姿はなかったそうですから。「生きてる」兵士の姿はね。」

「その仲間は今どうしてるんだ？今も連絡可能か？」

「無理です。彼は「アレ」のおなかの中です。」

「死んだのか…」

「はい・・・でも彼のおかげでいい情報が手に入りました。」

「まさかお前が命令して行かせたんじゃねえだろ？なー。」

「そ・・・そんな」とせじてません! 彼も今の僕と同じ考えだった
そうです。」

「そ・・・わうなのか。ならいいんだ。」

「でも武器が置いてある場所まで近づけるかわからなーぞ?」

「それに関してはいい策があります。くくく

「な・・なんだよ」

「一応確認しておきますが「アレ」は音に寄つてくるんですよね?」

「そ・・・そつだが」

「それで十分です。」

「まあいいか。で行先は〇〇〇駐屯地でいいんだな。」

「ここさう。

「珍しく静かだつたな。」

「あんたたちがじやべつまくるから入るすきがなかつたのよー。」

「おー入さん、ありがとうござります。」

京谷たちは駐屯地へ向かうことにした。
そして健斗がいつ「策」とは何なのか?
まだ明るい道をエンジン音を響かせながら突き進むハマーは「アレ」
を吹き飛ばしながら駐屯地を手指す。

欲望と死は隣り合わせ

やはり車は便利だ。

途中ガソリンスタンドに寄つて、給油したのだが駐屯地に着くまでに一十分程度しかかからなかつた。

今京谷たちの目の前には兵士の格好をした「アレ」が群れを成していた。

「健斗、ホントにこの中を進むのか？危険だと思つが・・・」

「大丈夫です。武器を手に入れればこっちの勝利みたいなものですから。」

「とりあえず車で奥まで進みましょう。そこからは歩いて武器を探すことにします！」

「はいはい」

アクセルを踏み込む。

兵士が身につけている金具が当たつてゐるのか、「アレ」を轡く度にガシャン！などと甲高い音が鳴る。

(車持つかな・・・)

京谷がそう思つた時だ。

ドンッ！

フワ

車が浮かんだ。

どうやら倒れていた「アレ」を轢いてしまったのが原因だろう。

「？」

着地と同時に京谷たちに衝撃が走る。

「どうして、おじいちゃんが、おじいさんのところへ戻るの？」

「わ・・・わからな
い！」

「とにかく！」まで来たらもう止まれない！」のまま突き進むぞ！」

それからも何度か車が浮かんだりしながらも走り続けた。

「うん、いいです！」

止まつた場所は、自衛官を父に持つ京谷ですかわからぬ場所だ。

(「こつは何でこんな的確に武器庫の在りかを探せるんだ?」)

「なあ健斗・・・」

「聞きたいことはわかつてます。なぜ場所を知つてゐるかですよね?」

「あ・・ああ」

「昔、こことは違つ場所ですが武器庫の場所がネット上に流れたことがあるんです。」

(じりなかつたなあ・・・)

「確かに駐屯地によつて場所は異なるとは思つましかば参考にはなりますからね。」

「だからここに絶対あるとは限りませんが適当に探し回るよつぱいと想つてます。」

「ちなみにあと田畠をつけてるのは一か所です。」

「説明どいつも。じゃあ早速探しに行くか！」

「ええ！」

「はい！」

こうして京谷たちは車から飛び出した。

辺りには「アレ」がいたが、車で暴れまわったので数は減ってる。
それでも相手にしてると時間がかかるぐらいの数は居るので、静かに進む。

「あそこです。」

健太が指をさしたのはいろいろな車両が待機させられている場所の向こう側だ。

いま自分たちがいる場所よりはるかに「アレ」の数が多い。

「本当に大丈夫か？結構いるぜ。」

「大丈夫です。」

といつて健斗はしょっていったバックをあさり始めた。

「これです。」

と言つて取りだしたのは、武器でもなく携帯でもなく、ただの人形だ。

「サルの人形？」

「はい。これで敵を引きつけます。」

その人形には小さなシンバルが取り付けられていた。

「これってあれか？ゼンマイを回すと人形が動いてシンバルをたたくやつか。」

「はい。美咲さんから「アレ」の話を聞いたときから準備してました。」

(よく家にあつたな・・・)

「とにかく使ってみましょう。効果があれば楽に探せるしね。」

「はい。」

ギリギリ…ギリギリ…
ゼンマイを回す音が響く。

そして何回か回した後に

パンパンパンパン！

と元気よく人形が動き始めた。

「ウウウウウウウ…・・・」

「アレ」が一斉に京谷たち、正確には人形を目指して動き始めた。

「よしー！」

「やつたあー

「じゅあ今のつに行きましゅうへー。」

人形を置いて一斉に走り出す。

途中京谷たちの足音に気がついて振り返るが、さすがはバットで殴り飛ばした。

「ついた！」

「なんで武器庫の扉が開いてんだ？」

「兵士が武器を調達中に入ってこられたのでしょうか。とにかく今はあるもの全部持つてこれましゅう。」

「あんまり欲張るなよ。必要最低限でいいんだ。これとなつたらバツトだつてあるしな。」

健斗が言っていたことはホントだったようだ。
武器庫の中にも「アレ」が数匹いた。
もちろん安全確保のために葬つたが……

「おい！すべてに鍵がかかってるぞ。」

「襲われてた兵士が鍵を持つているはずです。」

京谷は血で真っ赤に染まつた兵士のポケットに手を突っ込んで漁る。

チャリン・・・

「あつた！」

「じゃあ早速何処で使う鍵か調べましょ。」

次々と鍵穴に鍵を入れて試していく。

そして数分後・・・

「あいた！」

ガチャッ

そこにはそれぞれ一丁ずつ89式自動小銃、9mm拳銃、5.56mm機関銃、グレネードが少しうと弾丸がたくさん入っていた。

「 「 「やつたー。」 」 」

「ドンドン開けましょ、ハーハーあー。」

「鍵は一つしかなかつたから無理だ、それにこんだけあれば充分だらう。」

「いいえまだ足りませんね。僕はもつとほしいんですけど、こんな機会はめったにありませんからね・・・」

そういうと健斗は拳銃を取り出す。

「お待てー今撃つたら「アレ」が・・・」

ターンシ

遅かった。

外からは「アレ」が歩いてくる音がある。

「よし、開いた！」

「向やつてんだー！」んな密閉空間で追いつめられたら終わりだぞー。」

「その時は撃ち殺せばいいこんです。簡単でしょ？』

「お前……」

「ちゅうともう来てるわよー。」

「くそッ！」

何も言わず三人はそれぞれ武器をとる。

「いいんですか？そんなにでかい物を使って。」

「うつちの方が弾が多いだろ。」

「確かにそうですがそれは反動が強いですよ。僕たちなら小銃の方でもきついぐらいなのにそんなに大きいのじゃより一層ね。」

「いいんだよーとにかく撃てりやあいいんだー！」

「来たわよー！」

「よしー全員撃てーとにかく脱出路の確保だー。」

京谷は驚いた。

確かに少しのブレはあるもんだと思つていたが、弾は思つた以上に四方八方へ飛び散る。

肩への衝撃も強い。あと音が小さい拳銃とはケタ違つた。

「へ・・・へモツー当たらねえー。」

「だから直つたでしょー。これを使つてくださいこー。」

89式小銃を受け取る。

(確かに多少のブレはあるがやつぱりそのやつぱり止めちゃうー。)

「荷物をまとめるー。リリサまで来たら持てる物はもつていけー。」

(なんか直つーけどどうせ強盗みたいになつてきたな・・・)

京谷と健斗が撃ち、美咲が武器を持つことになった。

「なにこれッ！重！これじゃあ走れないわ！」

「何個か俺が持つ！さあいくぞ」

ターンッ！タタタタタタタタタタタタタタタタアン！

銃声が鳴り響く中京谷たちは脱出を始めた。

しかし田の前には恐ろしい数の「アレ」の群れ、後ろは強固な武器庫の壁。

進むことしか許されない状況を悲観せず京谷たちは突き進む・・・

生還（前書き）

今までなんで感想が来ないのかなと思つていましたが、設定のほうにミスがあり、コーナーからしか意見を受け付けない設定になつていきました。○、△、□、×
というわけで！
設定も直したのでこれからどんどん意見、この感想のほうをお聞かせください！

タタタタタタタタタタアン－タアンタアンタタタタタアン！

「撃てえ－撃てえ－撃てえ－！」

「くそッ！ 弾切れか！ 誰か弾薬をくれ－！」

「はい－！」

飛んできた弾倉を受け取る。

「くそッ！ キリがねえ！ いくら弾がたくさんあつても、いずれはなくなるぞ－。」

「おー！ 人さん、どうかに隠れてください－。」

「「え？」」

「いこから早く！」

言われた通り物陰に身を隠す。

ピンチ

コンチ

次の瞬間爆音と肉が弾ける音が聞こえた。
耳がキーンとする。爆風で服が乱れる。それくらい衝撃は強かつた。

「大丈夫ですか？」

「何をしたんだ！？」

「グレネードを投げました。さあ！行くなら今です！」

「ああ！行くぞ美咲！」

武器庫から出る。

相当な威力があったのか、武器庫の周りには「アレ」が一匹もいなかつた。

「よし車まで走るぞ！健斗援護は頼んだ。美咲は俺と健斗の間に入れ！」

「うん！」

「いくぞ！」

車に行くまで何度も爆発が聞こえた。

健斗が投げたのだろう。

京谷も銃で撃ちながら走り続ける。

「よし！車に入れ、さあ早く！援護は任せろー！」

まるで戦争映画のワンシーンのようだったが、弾はうまく当たらな

い。

大体は肩や腹に当たつてしまい、完全には倒すことができなかつた。
しかし今は美咲たちが無事に車までつければいい。

「二人とも入つたな！」

辺りを確認すると、京谷も車に乗り込む。

ブォン

思いつきりアクセルを踏んだ。

「脱出成功つてどこか・・・」

「京谷さんこれからどう行くんですか？」

「はい？」

「健斗。」

「今度あんな真似したらお前は置いて行くからな。」

「え？」

「僕はただ装備を充実させたくて・・・」

「死んじまつたら意味がねえだろー！」

「・・・・・」

「俺は言つたはずだ。最低限のものだけでいいとな、それなのに元前は欲張つた上に銃まで使って俺たちを危険な目にあわせた！」

「す・・すみません。」

「もう一度言つが今度あんな真似したらどこか適当な所に置いてく

からなー。」

「はい・・・・・

「わかればいい。じゃあ早速仕事を頼むぜ。」

「な・・なんでしょ、うー。」

「現在所持している武器の数や弾数を数えておいてくれ。」

「はいー! わかりました。」

「美咲、どこか行きたい場所とかあるか? 友人を助けたいとかさ。」

「うーん・・・・・・じゃ・・・・・じゃああいつの場所に行つてもうおつかな
あ・・・・・」

「あこいつ何?」

「長谷川悠樹いやつなんだナゾ・・・」

「あいつから銃が好きでさ・・・別に軍がすきってわけじゃないから言つならばガンオタつてとにかくしぃ・・・」

「厄介そつだな・・・」

「でもあこいつなら役に立つと思ひの。銃に無駄に詳しいし。」

「よしわかつた。そこの家はどうだ?」

「いいからなら四十分位つてといがな。」

「四十分…？」これから四十分つてまさか……

「そう。あいつは都市部に近い所に住んでるの。」

「一気に都市部まで近づくか・・・まあいつかは行こうとしてたし別にいいが、車が「アレ」の群れの中を通り持つかどうかだな・・・」

「それでもう一つ頼みがあるんだけど、この近くに住んでる三浦優華^かってやつのところまで連れてってほしこんだけじ。」

「どうしてだ?」

「あいつ女なんだけど車にじりが得意なの。それこそ改造とかね。」

「で?」

「だから優華に車を強化してもらわない?」

「いいねえ~。でもそいつが生きてるって保障はあんのか?」

「電話してみるわ。」

とても短い電話だった。

相手が死んでいたわけではない。美咲が必要最低限のことしか伝えなかつたからだ。

要するにこんな感じだ。

数分前。

プルプルプル・・・

表情が明るくなつた、相手がでてくれたのだろう。

すると、

「今から助けるわ。待つてなさい!」

そういうと一方的に通話を切つて、満面の笑みをこちりに向けてき

て、今に至る。

「行けつてか？まあ言われなくても生きてる人がいるなら助けに行くけどさ・・」

「じゅあよひしへ。道案内は任せとよねー！」

「はいはー。」

「京谷さん、御話し中申し訳ないんですが武器の残量を数え終わりましたー！」

「別にそこまで丁寧な話し方じゃなくていいんだけど・・・まあいい。でどうだつた？」

「はいー。まず使える銃器は89式小銃は僕と京谷さんが持っていたのを合わせて二丁、9mm拳銃が一丁、もう一丁はたぶんグレネードの爆発せいでしょ。壊れていきました。」

あと5・56mm機関銃は一丁とも無事です。その他グレネードが残り三つ、89式用の30発入り弾倉があと八つ、9mm用の九発入りのシングルカラム弾倉が九つ、

5・56mm用の一一百発撃てるリンクベルトが四つ、ちなみに5・56mm機関銃は89式用の弾倉も使えます。後はS&W M37エアーウェイトが三つ。さつとこんなものです。あとは鉄パイプ一つ、バット一つ、

僕が持ってきたシールドが一つくらいですかね・・・

「お・・お・ありがとうございます・・・」

「すゞいわね・・・」

「次は美咲さんのお友達を救うんですね！楽しみです。あーあと美咲さんはこれ使つといいですよ。」

渡してきたのは9mm拳銃だ。

「うん・・・」

「美咲さん、自分の体型に合った銃が一番いいんですよ。京谷さんを見ていてわかつたでしょ？」

「悔しいが言い返せん・・・」

「そうね。それに基本私は打撃派だしね。」

「じゃあいへぜえ！」

京谷はアクセルを踏み込む。

美咲の友達、三浦優華を救うために・・・

読んでください。ありがとうございます！

休む暇がない（前書き）

<http://ncode.syosetu.com/n1092z/>

上記のURLは僕の友達がやっている小説で、題材はおんなじです。
もし視聴者の皆さんのが向いたら見てみてください！

休む暇などない

美咲の言つ通りだつた。

三浦優華の家に着くのに、十分もかからなかつた。

「ホントにここか？これは車いじりが趣味のやつが住む家じゃねえ
だ。」

京谷が見ているのは閑静な住宅街の中の一際立つている豪邸だ。

「あんたのお嬢様のイメージはもう古いの。今は私たちと何ら変わ
りない生活を送っているわ。強いて言つなら困った時にはすぐ御金
を用意できる」とぐらぐらね。

「へえ～・・・まあ確かにこの豪邸の中にあるガレージで改造でき
るならいいかもな。」

「じゃあ行きましょ。あ、ちょっと待つて。」

とこつと美咲は車を降りて、門の近くに設置されている小さなイン
ターのボタンを押す。

しばらくすると美咲は笑顔で帰ってきた。

「いいわよ。」

「優華が車から降りないでまっすぐガレージまで来てつて言つていたからまた案内するわ。」

「敷地内もサー・チ済みか・・・怖いな・・・なあ健斗。」

「はい・・・」

「何回か遊びに来ているうちに覚えちゃったの!」

雑談をしているうちにガレージに着いた。

中で待っていたのは車のオイルか何かで汚れた服を着ている女性だった。

たしかに服装はお嬢様っぽくないが、溢れ出るオーラといつか風格が「私はお嬢様」と語っている。

「よう!美咲、やっぱり生きてたんだな!お前のじぶとは『キブ

リ以上だからな・・・

(ボーカルシチュな話しかだなあー)

「し・・失礼な！あんたこそお嬢様のくせによく生きていたわね。
もうじつへ逝ってしまったかと思つていたわー！」

（車の中では俺のお嬢様に対するイメージは否定したくせに書つて
いることは俺のイメージと一緒にやねえかー）

「まあ美咲も落ち着けつて、電話した時はうれしそうな顔してただ
う。」

「うめこーーー！」

「あー、あーあーあーうなのー？かわいそう、寂しかったのね。

「ヤーヤしながらからかつていてる。

「で優華さん、そくなんですかお願いできますか？」

「ええ、話は大体美咲から聞いたしね。準備は出来てるわ。あなたたちは家の中に入つて待つてくれる?」

「いいんですか!?」

「下手すると半日以上かかる可能性もあるからね。私は趣味だからいいんだけど、あなたたちはただ疲れるだけだからね。」

「で・・・でわお言葉に甘えさせてもらいます。」

京谷は普段使つたことがないような言葉を言つたため、ビックリしながらつた。

「たのんだわよ優華。」

「ええ。任せとおいで。」

美咲の案内で豪邸へと入っていた。

家に入つてみると、まずは玄関の規模が違つた。

広さはもちろんのこと、今歩いているのはたぶん大理石だろ？
こんな自分がここを歩いていいのか？と思いたくなるぐらい本当に
きれいだった。

リビングはさらにすごかった。

またもや床は大理石。この家だけで世界の半分の大理石を使つてい
るのではないだろうか。

(さすがにそれはないか・・・)

しかも、部屋の各所には壊したら一生かけて働かないと弁償できそ
うにないものばかりだ。

(ここに豪邸に引きこもつてれば大丈夫なんじやねえか?)

危つくそんな発想まで浮かんでくる。

だが、京谷の目的はあくまでも人命救助。こんなところでのんびり
はしていられない。

「んじゃ、休めるときに休んどきますかあ。」

「じゃあ私はシャワーへ行つてくるわ。」

「ねえ。つてか健斗は？」

「アレいつの間に・・・ま、いいんじゃない? いすれ戻つてくるでしょ? それにこの屋敷から出ない限りは安全よ。」

「そりだなあ~まあいいか俺も休みたいし。」

こづして京谷たちはつかの間の休憩を各自やりたいことをして過ごした。

健斗はどこに行つたか結局分からなかつたが・・・

三十分ぐらいたつたら物音が聞こえた。

美咲が風呂から上がつたんだろう。

京谷も疲れがたまっていたのかだんだんとまぶたが重くなつていく。

何時間経つただろうか、何処からか声が聞こえる。

「・・・こいの・・・は・・・き・・・くだ・・・い・・・」

「んあ?」

「せひいくわよ~もひできたんだつて。」

「早いなあ～。」

「はあ？ 結構かかってるはずだけビ…」

「何分くらい?」

「何分って……まあいいわ。五時間よ。」

「…結構かかってたんだな…」

(寝てて気付かなかつた……で結局健斗はどうここに行つたんだ？ まだ姿は見えないけど。)

「じゃあいくか。」

「ええ。」

意識がボーッとしているため、ガレージへ行く途中の記憶がところどころ消えているが、とりあえずガレージには着いた。

「「お・・おおー。」

京谷のぼーっとしていた意識が一気に覚醒する。車の変化はすぐかつた。

「まるで軍の車両だなあ。」

車は全体的に厚みを増した気がするし、なんといっても車の上部に取り付けられている機関銃は「普通の人間」が見たら、怯えて逃げ出すぐらいの威圧感を放つていた。

「でもあんなものどういって……」「

「僕たちがとっきてきたじゃないですか。」

「おおー健斗、こんなところにいたか。」

「ええ。 今ひとつやりたいことがありますので、ここで手伝つて
いました。」

「つかしそう」こなあ。よくじいまで出来たもんだ。」

「はい。何といっても機関銃を取り付けたところはナイスでしょう

!ねえ!

「ああー車に固定されてるなら当たりやすくなるしなー。」

「はいー！」れで撃ちまぐれます！ほかにもですねえ！・・・・・

「すゞい盛り上がりがつてゐるわねえ・・・」

「あの健斗って子面白いわねえ・・・車にも結構詳しかったし。」

「そ・・そ・う・な・の・!ま・・ま・あ・あ・り・が・と・ね。おかげで先に進めるわ。

L

『الرحلة؟』

「幼馴染の悠樹ってやつのとこよ。あいつの住んでいねといひは都
市部に近いからきっと『アレ』が多いこと思つたからあんたに車の強
化を頼んだのよ。」

「へえ、楽しそうねえ。」

「うううと……ゲーム見たいに言わないでよ。結構疲れるのよ。」

「普段はあまり動かないに行きたいなあ～」

優華は笑顔で言つてきているが体から出でてくる「反論は許しませんよ。」とこうオーラみたいなものは消し切れていない。

「はあ～あなたは何言つても聞かないでしょっ……京谷がいって言つたらいいわ。」

「あ、じゃあもう決まりねー！」

「まだ聞いてないでしょっが！」

「やつを聞いておこたのよ。」（寝てこむとき）

「最後聞こえなかつたんだけどーねえー！」

「じゅあ行きましょーー。まひまひ美咲も。」

「ま・・まあいいわよ…仲間は多い方がいいしね。女子も少なかつたし。」

京谷たちの元へ近付くとまだ車の装備で盛り上がっているようだ。ホント男ってのは単純なことで盛り上がる特別な生物だ。

「ほら、 もうやとこくわよ。」

「はあ？ 今日は？」に泊るんだろう？ 外は暗いしな。」

「何処まで図々しいのよー？ そもそも悠斗も明日こは死んでいるかも知れないつてのよ？」

「今生きてるかもわからんだろ。」

「あ・・・」

「ナウニウとも含めて今日は？」で作戦会議も含めた休憩こじよ
うぜーいこですかよね？ 優華わざ

「ええ。 もうひどい。」

「ああ・・・ちょっと優華まで・・・」

「疲れた状態で出て行って全員そろって共倒れするよりはましでしょ?それに車のメンテナンスももう少しはあるしな。」

「とうわけだ。いいだろ美咲。」

「・・・わかった。明日いそ行きましょ。」

「 もうりんだ。」

そして各自の自由行動が始まる。

京谷と健斗は射撃練習。（場所は広い敷地の一隅を借りてやっている。）

優華はもちろんガレージでメンテナンス中。

優華はむしろ休憩している時よりも顔が活き活きしている。

美咲は部屋に行つたのか。敷地内には見当たらない。

こつしてまた一日を終えることになった京谷は安心している半面こんな普通のことがここまで愛おしくなる位にまで状況が急速に変化していくことに焦りも感じていた。

(明日一矢は美味のもつ一人の友達を助けなきやな。)

つタンー・という銃声が鳴り響く中、京谷はひつやうとそんなことを考える。

しかつりとした眼差しを射撃のために向けながら・・・
部屋に戻ったのは十一時位だ。これからシャワーへ行つたりするとなると寝るのは十一時は超えるだらう。

やつぱり十一時近くになつた。

(ふ～やうと寝れるぜ。しかもかなり上質な布団にー)

ペー・ペー・ペー・ペー・ペー・

甲高い音が鳴り響く。

「...?」

戸惑いながらも京谷は確実に武器を取りに動いていた。

休む暇がない（後書き）

もしかしたら見てくださってる方には、車に詳しい方がいらっしゃるかもしれませんね。

そしてその人は「そんな改造できるわけねえだろー」と思っているかもしません。

たぶんそのとおりです。

ただそこはハイクションとこうひとでお許しいただけないでしょうか？

他にも現実ではありえないことが書かれてるかもしれませんがあな
しください・・・

決意（前書き）

<http://ncode.syosetu.com/n9332y/>

上記のURLは前紹介した人とは違う人です。
ぜひ見てみてください！

あと、意見・ご感想のほうも遠慮せずにどんどん書き込んでください。
それではじっくりお読みください。
まあそんなに長くはないんですが・・・

決意

「どこからか音が響いている。

何処からかどこよりも、この家の音が出ている。

「な・・なんだよ。せっかく上質な布団で寝れそうだったのに…」

といいつも手には武器がちゃんと握りこまれていた。
ポケットには三つのマガジンと、一つのグレネード。

「昨日は素直に寝させてくれたじゃねえかよ…・・・」

その時扉が勢いよく開かれた。

「侵入者よ。数こそ少ないけれど侵入経路を塞いでおかないとまた来るわ。」

「わかつてゐる。今から行こうとしてたところだ。で、場所は？」

「ガレージの近くよ。」

「車の状況は？壊されたりしてないよな？」

「それは心配しなくていいわ。シャッターは閉まってるし。」

「でもいつまでもつかは分からぬよな・・・」

「ええ。だから懲りましょ。」

ガレージまで走る京谷たち。

二、三分程度でガレージには着いた。

「大丈夫か！？」

美咲に無事だということ確認しておきながら、自分でも確認してしまつ京谷。

意外に仲間思いである。

「ええ。無事よ。」

「京谷さんたちも無事でしたか・・・」

「よし。なら今から侵入してきたところを塞いでとにかく明日までは耐え抜くぞー。」

しかし、健斗と優華は不敵な笑みを浮かべながら京谷が予想していなかつた言葉を告げる。

「その必要はないわ。」

「え?」

「もう出れますよー。京谷さん。」

「まじかー?」

あまりにも突然のことで驚く京谷。

無理もないだろ？、京谷がガレージから出て自由時間を過ごし今までに一、二時間と行ったところだ。

「じゃ……じゃあ今すぐ美咲の友達を救いに行くか！」

「ええ！」

「はい！」

「わかったわ。」

車に乗り込む美咲たち。

「あ・・あれ？ 優華さんはいらっしゃりでしょ？」

運転席を指差す京谷。

「「めんね。運転はできないの……」

「いえいえー別にいいんですよ。ここまで来る間も僕が運転してたんで。」

「つして全員車に乗り込んだところでガレージのシャッターがゆがみ始める。

(まことにあ……)

「健斗……」

「はい！わかつてます！」

真っ先に車の天井のふたを開け、銃座に就く健斗。

（やつにえればあの穴はどうやって開けたんだ？部屋にいたおれたちには一切音は聞こえなかつたけど……）

///キツ！

「そ・・そんないるのかー…？」

「こちまよお～」

田を輝かせながら銃のグリップを握る手に力を入れる健斗。

「撃てええ！」

健斗からの返事はなく、京谷が「う」と言い始めた時には撃ち始めていた。

「今です京谷さん！」

卷之二

アクセルを踏み込む。

直後、強化された車両はガレージのシャッターを紙屑のように吹き飛ばして庭に出た。

「さ・・・・さば一門がふさがつてゐるぞー。」

」」！」

優華は携帯みたいな端末を取り出し操作する。

その瞬間門が開き始める。

(なんつーか・・・ハイテクだな、この家って。)

「わうわや美咲ー」これからどちらに向かえばいいんだ?

「とりあえず右。あと優華の家からなら近道を使えば十分ぐらいで着くわ。」

(車つて便利・・・)

「つてかついに都市部に近付くんだな・・・

「ええ。」

「優華さん一応言つておきますけど、この世界はもうゲームみたいになつています。俗に言つ殺るか、殺られるかです。
嘘みたいですがこれは本當で敵は弱点である頭を的確に狙うか再起不能になるまでバラバラにするかの一つしか、対抗する術は今のところありません。」

「ええ。わかつてゐるわ。それを承知で付いてきたんだから。」

と言つゝも優華の体は微弱に震えていた。

(強がつてはいるけど優華さんも女だからな…俺と健斗で守るしか
ないよな…)

「じゃあ飛ばすぜー」

一応燃料メーターを確認しておく。
マックスまで燃料は入っていた。

「あー…そうだ私も一応言つておくけどガソリンの予備はあるからい
ざとなつたら使つてね。」

(なんで自分で運転しないのに家にガソリンなんてあるんだ?)

「は…はい。あらがとうござます」

(抜かりねえな…しかも探してたバットとかバックがすでに積
み込まれている…)

「京谷そこ左ー！」

「了解！」

また一人仲間が増えた京谷チームは次の目標は美咲の幼馴染である悠樹を救うことに定め、夜の街をエンジン音を響かせながら突き進む。

決意（後書き）

読んでくださった方ありがとうございました。

大きな一步（前書き）

だんだん投稿する間隔が開いてくると思いますが、何卒よろしくお願ひいたします。では、「ゆっくりお読みください」。

大きな一步

優華の家を出てから十分ぐらいたつた。

もう都市部に入つたからか、見渡す限りは「アレ」ばかり。

それでも美咲が近道を教えてくれるため、あまり「アレ」がいな道を通つてこれた。

だがもうそろそろ美咲の案内も聞かなくなるだらつと京谷は考えていた。

（いぐら散歩が好きだからつて自分の家から何十キロも離れた都市部までは来ないだらうしな・・・近道もむづやうそろ無理か。）

「えー・・・ヒセヒマ右!-じゃなくて・・・左よー。」

（やつぱり段々曖昧になつてきてる・・・まあ今まで案内してくれただけでもありがたいか。）

「あーーーよ。 ヒセが悠樹の家だわー。」

「本当か?」

京谷がそう聞き直したのには理由がある。

美咲が言うには今前方にある一般的な家屋が悠樹が住んでいる家らしいが、京谷は中に生存者はいないんじゃない？と思つていた。

なぜなら、ガラスは割れていて玄関の扉も無造作に開けっぱなしになつており、真っ白にきれいに塗られた壁には所々に黒ずんだ血が付いていたからだ。

美咲はそんな家を指差しながら「ここよ！」というのだ。

中に生きた悠樹がいるなんて今車にいる美咲以外誰も考えていないだろう。

「じゃあ早速行きましょうか。悠樹を助けにね。」

「おう・・・」

（も・・もしもだが死んでいた場合はどうするんだろうか・・・・・周りが見えなくなつて敵に突つ込んで行つたりしないだろうな・・・・・）

「健斗は銃座について待つていてくれるか？いざとなつたら援護してほしいんだが・・・」

「了解です！」

「よし。じゃあ各自装備を確認するんだ。いきなり銃は使うなよ、少ない数ならバットとかで十分だからな。」

「「ええ」」

「うして悠樹救出のために家に入り込んだ三人は愕然とする。

家中は外よりもひどく、辺り一面血だらけで壁紙もボロボロだ。
「アレ」は音がない限り攻撃はしないので、壁紙の傷は住人が抵抗した後であろう。

すると、ここにきてようやく現実が見え始めたのか、美咲が何かブツブツ言い始めた。

「悠樹が死ぬなんてありえない・・・悠樹が死ぬなんて・・・
・・・」

(おいおい・・・女って精神面は男より強いんじゃないのかー!?まあ
こんな状況だしな・・・常識なんてもつ通用しないよな。)

「おい美咲。まだ死んだってわけじゃ・・・」

「うむむむーー」

(フツーに来る)とは予想済みだぜ美咲さんよーー()

「ゴチャゴチャ言つてんなら車に戻れ。足手まといはいらねえんだよ。」

(健斗、お前を車に残したのは足手まといだからってわけじゃねえからな。)

「・・・・・」

「後は俺と優華さんで行くからお前は戻つてろ。付いてこられた二人が共倒れなんて御免だからな。」

「そ・・そこまで言わなくともいいんじゃない京谷君?」

(優華さんすみません・・・これも美咲のためなんです!)

「わかったわ・・・」

(おー意外に素直…)

「ただ絶対に連れてきてね。」

「死んでたら元も子も……」

京谷がせつこいつをくりと美咲は振り返り銃を向ける。
今のは京谷でもミスつたーと思つてのことだらう。

「やうこいつのが困るつてこつてんだよ。ジヨークだよジヨーク。必ず助けて見せるつて、安心しろよ。」

「やう・・・・・」

(よ・・・よかつたあ～ジヨークつて言つて許してもらえるなんて
器でけえんだか馬鹿なんだか・・・まあとにかく美咲様様だな。)

美咲は車に帰つていた。

しーんとした家にある取り残されたような感覚に陥る京谷と優華。

「やうきのは言こすもじやないかしりへ」

「俺も思います、でもこまが肝心なんですよ。このつらい時をいか
に乗り切れるかがね・・・」

(といつても見知らぬ人たちの死でみんなに感情的になる俺が友達の死を曰にしたらどうなるんだろう・・・)

「と・・とにかく家全体を見て回りますか。」

「ええ。」

わつやも言つたがこの家は優華のような豪邸ではなくじへ一般的な大きさの家で、調べるのは何の苦労もない。

強いて言つならいつ来るかわからない「アレ」に対しても警戒していなければいけないところのが辛いぐらいだらう。しかし苦労がまた一つ増えることになった。

「なんであるなにー..ビーに潜んでやがったんだ！」

「とにかく今は隠れましよう。」

普通なら真っ先に外へ出るべきなのだろうが、玄関付近にも「アレ」はいつの間にか湧いていた。
なので現在は一階へ避難中である。

「よし、元気に入らう。」

一番奥の部屋だ。

「 驚きましたわ。」

「 はいー。」

京谷はドアノブを握ると同時に体を前へ進ませた。

「 ゴンッ！

開かない。

「なぜ・・・？」

優華が疑問に思つてこるときには、京谷は次の行動へと移つていった。
バットを頭上へ掲げる京谷。

次の瞬間にには振り下ろしていった。

「 りああー。」

ガシャーン

ドアノブはいとも簡単に壊れた。

だが京谷が次に取った行動は意外だった。

「いくぜえー！」

ドン

ドン

ドオン！

「よしー！」

扉へのタックルだ。

(ドアノブ壊した意味はあつたのかしら・・・)

中へ入つてみると一階とは違ひきれいなままだつた。
床にはBB弾などが転がっている。

(まさかこじがー！)

そのとき突然押入れを開けるよつた音と共に、黒い影が京谷の目の
前に飛び出す。

「俺は簡単にはやられないぜーー四、一四、二二四なら道連れにしてやるからなあー。」

などと台詞を言いながら襲いかかって来た物体に向つて京谷は冷静にバットを突き出す。

あとはその物体がこちらに来る速度によつて威力は決まる。

「！」はあ！？

クリティカルヒットだ。

バットは襲つてきた物体の腹にめり込んでいる。
ニヤニヤしながら京谷は襲いかかつてきた物体（別名悠樹）に向かつて歩きだす。

「ちょ・・・ちょっと待つて・・・お前ら人間だろ。襲いかかつてから初めて気づいたんだ…許してくれ・・・」

「いやー俺はただどこの悠樹君のせいで銃を向けられただけで君に何の恨みもない健全な人ですよ？許してくれだなんてまるでこっちが悪いみたいじゃないか。」

「なぜおれの名前を・・・あーいやなんでも…」

「ん? なんだつて~?」

そりゃ一矢一矢しながら問い合わせる京谷。

「遊んでる暇はないわよ京谷君ーもつ来るわー!」

「はいはい。」

倒れこんでいる悠樹にすっと手を差し出す京谷。
初めからこれならかなりの紳士という印象を悠樹に与えられただろ
う。

「んじゃ あ美咲も待ってる」とだしそうとこくか。

「美咲が!~?」

「ああ。 あいつのおかげでお前は助かった様なもんだぜ?」

「今はどーー?」

「車だよ。今からその車に向かうの前せじれを使え。」

京谷が渡したのは89式小銃とマガジン三つだ。

「……。」

「礼なら健斗つてやつて言へよ、車にこるから。だから今は車まで戻るんだ。」

「了解ー。」

(健斗といふ悠樹といいなんで「了解ー」なんだ?)

「じゃあここから降りましょー。丈夫なロープもあつますし準備は万端ですかー。」

「え・・・ひー」

(丈夫なロープつて・・あからさまに降りしゃがーつてか
なんでこつまで敬語こー?)

「ついて無事一階から一気に庭まで下りることができた京谷たちは車に向かつて走った。（ロープは本当に丈夫だった）

「京谷さん、無事だつたんですね、さあはやく！」

ダダダダダダダツダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダ

健斗が握る軽機関銃が火を噴く。

自分に当たらないかひやひやする。

そんな中でも田を輝かせているやつがいる。

悠樹だ。

（いくらガンオタだからって自分の近くを通る弾丸が怖くないわけないだろ！）

だが悠樹が見せる表情は恐怖でも怒りでも悲しみでもなく（悲しみはないか・・・）喜びだ。

見てるこっちが身ぶるいしてしましそうなぐらいだ。

だが、周りを見ていられるだけの余裕ができるといふことに気づいてない京谷も凄いもんだ。

「よし！一人とも早く入れ！」

ひと足早く着いた京谷が窓を開け、車から叫ぶ。

敵は四方八方から近付いていた。

「全員乗ったわ！」

美咲の掛け声を聞いた瞬間に京谷はいつもの通りアクセルを踏み込む。

車は家に向かつてではなく、道路に向かつて止めていたのですぐ出された。

まだ京谷の加速方法に慣れていない悠樹はシートに顔面を強打する。

(ざまあー)

ミラー越しに美咲に睨まれている気がしたのでそんな考えは払拭して道路を突き進む。

現在時刻十一時四十分。

目標もなく進む車は暗い夜の街にエンジン音を響かせる・・・

大きな一步（後書き）

読んでくださった方、本当にありがとうございます。
そしてなんと！

皆様のおかげで、PV数は1000を突破し、ユニーク数も150
を超えられました！

本当にありがとうございます！

これからもよろしくお願いします。

あと、意見・ご感想もどんどん書き込んでください！

馬鹿三人

あれから京谷たちは次の目標をどこにするかで迷っていた。
もちろん車は走らせたままである。

「やつぱつ今田はもう休んだ方がいいんじゃないかな？」

「でもあんただって友達は救いたいでしょう？」

「確かにそうだけど今日はいろいろあって疲れたる、それにこの車
だってこれ以上人を入れられるとは思えない。」

「確かにそうだけど……」

「だから今日はもう休んで明日もう一一台車入手してから救出され
ばいいだろ。」

「もう一一台て、だれが運転すんのよ？」

「悠樹に決まってるだろ。」

「えーまだペーパーなのに・・・」

「え?なんか言った?」

「いいやー光榮ですって言つたんですよ・・・はあ・・・」

(こつはホントいじりがいがあるなあ・・・)

「ま、とこつわけでドライバーは確保できたんだ、後は車だろ。」

「や・・せうね。じゃあ今日は休みましょうか。」

「こつたこど二で?」

優華のひとつ質問で車内はシーンとなつた。

無理もないだらう、もつこには都市部で周りは「アレ」だらけで安全な場所なんてそういうなこゝ、もしあつたとしても先客がいるかもしけれない。

車内で寝ようにも、一、三人ならまだしも今車内にいるのは五人だ。とてもじゃないが疲れが取れるとは思えない。

「じゃああそこなんぞどうかしら?」

優華が指差したのは警察署だ。

五階建てでなかなかの大きさのものだ。
残念だが先客がいないとは思えない。

「たぶん無理だと・・・」

「行ってみましょ॥。」

みんながそんな田で俺を見ているのが//リー越しに分かった。

(「んなの拒否できねえじゃん!」)

「わかつたよ!でも車はどうすんだ?」

「車のままで突っ込んでもいいわ。」

「は?」

「私が改造したのよ?そりゃ人の肩が改造したのとは違う。」

(そんなこといわれてもなあ~)

「でも限度つてものが・・・」

「こざとなつたら僕が機銃で警察署の門でもシャッターでもなんでも吹き飛ばしますよ！」

「わかつたよ・・・」

そついつて方向転換してアクセルを踏み込む京谷。

（やつぱり怖こぜられ！）

でも時すでに遅し。

この車の速度なら後二十秒ぐらいで警察署に激突だ。

（腹をくくるか・・・）

「みんな！衝撃に備えろ！突っ込むぞ！」

ガシャーン！
ドーン・・・
パラパラパラ・・・

余裕で警察署に入れた。

(「Jの車両普通に軍の車両より強いんじゃねえか?」)

「私を崇めなさいー!」の愚民共め。」

そう言って満面の笑みを浮かべる優華。
そしてそれに苦笑いしながら参加する二人。

(安心したんだな・・・)

「健斗! 安全確認するがー!」

「了解です!」

「俺もお供しますー!」

京谷たちは階段を上っていく。

「つてかあいつら馬鹿三人の無駄な連携力は何なの? しかもリーダーは京谷みたいだし。」

「楽しそうで何よりじゃない。まあ私たちは一階の安全でも確保し

ておきますか。」「

「やうね・・・」

いつして自動的に一手に分かれる」とになつた京谷たちは各自作業を始めていた。

一階の京谷たちは・・・

「やうぱっ座しこのはじいか・・・」

「ええ。やうみたいですね。」

「どうやって入ります?鍵がなきや無理みたいですがど・・・」

三人が止まっているのは武器庫前である。
やはり銃は男のロマンなのだろうか?
はじめは音が出ると嫌がっていた京谷も、安全な場所ではやはり銃
がほしいらしい。

「壁にグレネードを投げましょつか。」

「跳ね返つたら俺たちは仲良くなりやしないか。」

「じゃあグレネードにガムテープをつけて壁にくっつけましょうか！」

「お前は神か！」

戦いの場では冴えてる京谷の脳も普段はこんなもんだ。

「ちよっと待つてくれださー・・・」

鞄をあさる健斗。

(あの鞄は四次元ポケットなのか?なんでも出てくるなあ)

数分後・・・

「できましたあー

「よし!作戦開始だ!」

「イヒッサー!」

京谷の号令で武器庫の近くまで走つていく健斗。

そして健斗がグレネードをくつつけたのは扉ではなく、その近くの壁だ。

理由は単純に壁の方が叩いた時の音が軽い気がしたから、脆いんじやね?と予想したからである。

「隠れて!」

ボーン!

パラパラ・・・・・・

「「「ツシャアー!」」

こうして馬鹿三人は武器を手に入れた。

一階の美咲たちは・・・・・

「なんていうか・・・想像道理の警察署つて感じね。」

「まあやつじょひね。」「」警察署です。」

「とつあえず裏口は机とかでバリケードを作つとおもしちゃう。」

「わいね・・・」

「なんてこりが平和が一番なのはわかってるけど、これはこれでつまらないわね。」

「わいね。やつれあの馬鹿たちはなんかまたやつたみたいだしね。」

「」」の作業が終わったら合流してみましょ。」

「じゅあ早く終わりませかー。」

「ええー。」

京谷たち安全地帯を手に入れた。

しかし京谷にはまだ救うべきものがある。

その目標をクリアするには明日まで生き残ることが絶対条件。

こうしてまた、京谷の戦いは終わり朝になつたらまた始まる、この急速に変化する世界のルールに京谷たちはいつまで耐えられるのか・

準備（前書き）

毎度毎度見てくださっている方、ありがとうございます。
ひどい文ではありますが、これからも投稿していきたいと思つているので
応援よろしくです^_^

「うむ。……なにせ元の娘だ。」

美咲たちは現在京谷たちと合流して、破壊された壁から出でてくる馬鹿三人の姿を見て愕然としている。

無理もないうふ。武器庫から出てきた京谷たちは金貴一や二や三、ながら手のひらサイズくらいの箱をたくさん持つて來ていたのだか

「こや～マジに」サイコーだぜ！弾しかなかつたけどそれでも十分だよな！」

「「ええ！」

(一)の馬鹿どもせ・・・(

「まあいいわ。そういえば一階には警官の死体はなかつたけど全員逃げたのかしら?」

三人が唐突に黙る。

(「Jの反応は・・・」)

「あの…もし死体があつたならそこから武器を調達したいんだけど
・
・

「あー優華さんは何も持つてないしな。」

「俺も持つてないっす!」

(やうひいや忘れてたな・・・一人分の武器か・・・)

「健斗。車まで行つて俺が苦手な奴持つてきてくれないか?」

「苦手な奴?・・・・・あー了解しました!」

そういうつて笑顔で走り出す健斗。

みんなの表情は「苦手な奴つてなに?」といった感じの表情だ。
一番初めからいる美咲ですらその表情を浮かべている。

「京谷さん。これですよね?」

健斗が帰ってきた。

健斗の手の中には何か大きな物が抱えられている。

その正体は・・・・・

「5・56mm機関銃じゃないですかーー？」

やはり悠樹が一番早く気づいた。

「こんなのあつたんですか！？いいなあ～」

「だからこれはお前が使え。」

「……」

「い・・・・いんすか？」

「俺や健斗じゃまともに当てられないんだよ・・・・それなら少しでも可能性があるやつに使わせた方がいいだろ。」「

「あ・・・あ・・・ありがたせーー！」

(「ひやつて部下を壊してこむの?京谷。）

そしてちりつと隣にいる優華を見る。

(もしかしたら私にも部下ができるかもしだけ……)

「無理よ。あなたじゃ無理。」

(超能力者め……)

「そんなんじやないわ。」

「優華をさわつきから何言つてんですか?」

「いいえなんでもないわ。」

美咲は考えることをやめた。

そんな美咲に向かつて優華は一言言つた。

「あんた単純すげよ。表情にすぐ出していくんだから。」

(だから普通は無理でしょ……)

「何年友達やつてると聞いてんの?」

「十年以上……」

「おい。一人とも聞いてんのか?」

京谷が唐突に話しかけてきた。

「え? なにが?」

「つて何一つ聞いてなかつたのかよーまあいい、初めからもう一回話すからよーく聞いとけ。」

京谷の話をまとめるとこうだ。

まず優華の武器は京谷がサブとして使っていたS&W M37エアーウェイトを渡すことにして、

後は手分けして一階の安全確保。

なぜもう一回やるのかといふと、京谷たちは一階に上つてすぐ近くにあつた武器庫に引きつけられて、

一階の安全確保はまるでやつていなかつたからだ。

さつき死体がないことについての質問に答えられなかつたのも、これが理由だ。

「…というわけだ。」

「肩。」

「美咲・・・お前は一人で一階にいるか?」

「だつてそりでしょ! 私たちは汗かいてまでバリケードとか作つてたのにあんたらはニヤニヤしながら好きなことやつてたんでしょ!」

「女つてのはいちいちなんかいわねえと行動できねえのかよ?」

「まあまあ、二人とも落ち着いて。今は安全確保が優先でしょ? 一階も入れれば四階分の安全を確保しなきゃいけないんだから。」

「さすが優華さん! わかつてらつしゃる。ゼンかのおバカさんとは格が違つてらつしゃる。」

「あひ、 やつぱりわかる?..」

「誰が馬鹿よー。」

「俺美咲が馬鹿だなんて言ったか？」

「あ……」

四人の眼差しが美咲に突き刺さる。

(ぐっ！はめられた！)

「で……でも流れ的に私のこと言つてるでしょー！」

「ホント女つて食い下がるつてことはしらねえんだな……」「もつといい今回は俺の負けだ。とにかく今は安全確保を優先しよう。」

「

(安全の確保が最優先つてサボつてた俺がいえる言葉じゃないな……)

「二人一組でチームを組め！」

「一人あまりが出ますよ?」

「俺は一人で行く。」

「 「 「 「 」 」 」

「 なあにござれとなつたら呼ぶよ。でもさつきの爆発でなこにも来ないとこい」とは「アレ」はこないと想つんだがな。」

「 わ・・・ わう。」

「 じやあおぬき取りかかってくれー。」

「 「 わーー。」 」

「 「 んんー。」 」

「 ついで京都たちまへ諸侯の安全確保を始めた。

準備（後書き）

読んでくださった方ありがとうございました！

そういうえばもうそろそろ固定寄せみたいな感じの方が出でてくる頃でしょうか？

まだ早いですね^ ^；

とにかくこれからもがんばりますので、意見・ご感想または文の評価、ストーリーの評価などもよろしくお願いします。

殺戮（前書き）

お気に入り登録してくださった方、見てくださった方、ありがとうございます！

それでは、じゅうくりお読みください。

あれから数分間一階を見て回ったが、使えそつなものもなければ、「アレ」を見かけることもなかつた。

「なんてこいつか拍子抜けだな・・・」

再び武器庫の前に集まつた京谷たちほそんな事を話してた。

「でもまだ三階あるのよ~」

「」の調子でサクサク進んでくれるといれしこんだけどさな・・・
「なんかお約束のパターンとか来そつて怖いなあ・・・」

なんてことを話しながら三階へ向ひ京谷たち。
そしてお約束のフラグ回収。

「ちゅッ...じつから出やがつたー?..まさか俺があんな」とを言つた
から無駄なフラグが・・・」

「ううさいわね！現実にフラグなんてあるわけないでしょー。ただ単に音に寄つてきただけでしょー。」

一人して大声を出して「アレ」を引きつけていたことをまるで自覚していない京谷と美咲。

「戦いは避けられないな・・・」

「健斗！悠樹！俺の援護は頼んだ、美咲と優華さんは自分の身を守つていってくれ！」

「守れってあんた、」の中で一番危ないのはあんたなのよー…？

「なんで？」

本当に分からなそうな顔をしている京谷。

「あんた遠距離武器持つてないでしょ。」

「そんなことかよ・・・元々俺は近距離武器使ってたひ。」

「今と前じゃ状況が・・・」

「それに鉄パイプもあるし一刀流だぜ。」

そう言つて京谷は鉄パイプとバットを手に取り満面の笑みを浮かべる。

「　　」

（　　）の人にこの状況を楽しんでない！？）（　　）

「何だお前たちその顔は、ほらもう『アレ』が迫ってきてるぞ。」

そのあとは京谷無双だ。

鉄パイプとバットを振り回しながら「アレ」の群れへ突っ込んでいったが、

途中で鉄パイプは捨てていた。

両手でしつかり持たないと威力が小さくなると思つたのだろう。残りはあと数体といったところか。

「悠樹・・・後は頼んだ・・・もう眠いよ・・・」

とこうと階段の方へ向かっていき、階段に座った後は動かなくなつた。

「じうこつ神経じてたらこんなとれこ寝れんのよー。」

((あ、寝たんだ。))

悠樹と健斗は死んだと思つていた。

「まあ車の運転とかもしてたんだし疲れたんでしょ。」

「あみんな！リーダーの安眠を守るわよ！」

といつて銃を撃ち始める優華。

彼女には一度安眠について詳しく教えた方がいいかもしない。だが、銃声を聞いても起きない京谷も少しおかしいだろ？

数分後・・・・

辺りは血に染まっていた。

もちろん美咲たちの血ではない、「アレ」の血だ。

「今日さもつ寝ましょー、京谷も寝ちゃつたし。」

「でも上から「アレ」が来るかもしないですよー。」

「だから四階へ続く階段には軽くバリケードを作りましょう。」

「なるほど、じゃあさっそく取り掛かりますか。」

「ええ。」

更に数分後・・・

「できた!」

「で、京谷ちゃんは」のまま寝かせておくんですか?」

「さうしましょう。」

「でも体が冷えるんじゃ・・・。」

「ナニしまじょ!」

美咲の表情が動かない。

怒ってる顔よりよっぽど怖い。

「それじゃ各自すきな部屋で寝るとしましょうか。」

「「はい…」」

「ええ。」

それから数時間したら物音が聞こえてきた。

みんなが思つたことは同じ、

（（（（「アレ」降りてきたか・・・））））
だが実際は違う。

「・・・いよ～・・・

「・・・い・・・なー・・・つた？」

どこから聞いても「人間」の声だ。

今部屋の外にいる「人間」として考えられるのは、逃げてきた一般
人が京谷かの一択だ。

しかし警察署の一階は美咲と優華がバリケードを築いたので入って
これない。

つまり・・・

(（京谷をさやつぱり寒かつたんだ・・部屋に入れてあげなへや
ー。）

健斗と悠樹はやさしいもんだ。

それに対しても美咲と優華は・・・

（ざま見ろー）

（・・・・・）

美咲は京谷のことなど微塵も気にせず、優華においては物音の正体
が京谷だと知った直後に眠りに入ってしまった。

ところわけで、部屋から出て京谷を部屋に入ってくれたのは男子二
名だ。

翌日・・・

「まあいいじゃないか出で因縁は見に行く必要はねえな。」

「あーりへどひしたの？顔色悪いけど風邪でも引いたの？」

「・・・・・・・・・・・・

黙る京谷。

続いて健斗が話しかける。

「京谷さん、大丈夫ですか？」

「お前たちは天使だ。」

「「く？」

「ちよつとー私のこと無視しない?」

「・・・・・・・・・・・・

再び黙る京谷。

すると優華が話し始めた。

「とにかく今日は車を手に入れたり、京谷君の友達助けたりしなきゃいけないんだから早くここを出発しましょう。」

「そうですね。」

「ちゅーちゅー、優華だつて私と一緒に寝てたんだから、こいつはすー、それでも無視したんだから同罪でしょー。」

「あ・・・せっぱつづいてたんだな・・・」

「あ・・・」

「言つとくけど私寝てた。」

周りに仲間がない」とに焦る美咲。

「なーんてな。俺はこんなこといじける男じゃないぜー。」

「え?」

「いやー昨日の口論は惨敗したからちゅーとこじめつかひの悪つたからやー、でもホントに寒かったんだぜ?」

「・・・・・」

「おー悔しいか？」

「別に…」

そう言つて京谷の隣を通りていった美咲はわざといらっしゃるをぶつけて
いった。

(当たり屋かお前は・・・)

色々あつたが朝食を済ませた京谷たちは、車に乗り込む。

「武器とか忘れてないよな?」

「「大丈夫ですー。」」

「「大丈夫よー。」」

「よし、じゃあいぐせー。」

勢いよく警察署から飛び出す武装車両。

普通なら道路に出た時点で事故が起きていたのかもしねない。
だが今が道路は京谷たちの車しか走っていない。

さびしい風景ではあるが、友達を救わなければいけない京谷ことつては渋滞に巻き込まれるよりはいい。

「じゃあまづ車屋に行くか・・・」

「そうね・・・」

静かな街を進み続けるエンジン音、搖ぎ無い決意を胸に京谷はアクセルを踏み込む。

目指すは友達救出だ。

殺戮（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございました！

大きな壁

車屋にはすぐ着いた。

あれから誰も車を持つていつていなか、品ぞろえはばっちりだつた。

「できるだけ大きいのがいいかな? いざとなつたら寝れるぐらいの。」

「そうだな。でも俺たちの車以外は加工してないから前みたいに車がはねたら終わりだぞ。」

(まあどんな車でも終わりだけど……)

「今はとにかく人がのれりやいいよ。」

「じゃあアレなんてどうですか?」

「おースポーツカーか!」

京谷は前から目をつけてはいたが、人数が三人だったため諦めていた。

「じゃああれは俺が運転する。」

「ええ~」

悠樹が声を上げる。

「お前だって見ず知らずの俺の友達を隣に乗せるのは気が悪いだろ。」

「

「いや別に……」

「…………」

京谷は真顔のままじーっと悠樹を睨んでみた。

周りから見たら見つめ合っていたように見えただろう。だが悠樹はその数秒間の間にすべてを悟り、自分の身を守るために言葉を発した。

「そ……そりですよねー」

「悠樹。お前は物分かりが早くて素晴らしいよ。フツフツフ……」

怪しげに笑い声（^~^）を上げる京谷。

「じゃあまずは鍵をとつひきし、その次にかぎ合せね。」

「ああ、そうしよう。」

（あとよ・・・俺鍵戻した記憶がないな・・・）

「先に行つてくれ、ちよつと車に忘れものをした。」

「わかったわ。」「アレ」の奇襲に気をつけろのよ。」

「へいへい。」

（もし、美咲たちが鍵を見つけられればいいんだが俺には元に戻して記憶はない・・・もし車になければ無駄足・・・）

「頼むぜ神様よー！」それでも耐えてやつてきただかひよー。」

駆け足で車へ走る京谷。

数分後・・・

「京谷一、鍵なかつたんだけど私たち鍵びいにやつたけ？確かあなたが持つてたはずよね？」

遂に美咲たちが帰つてしまつた。

「うふとあなた何やつてんのーー？」

京谷はスポーツカーの上に乗つて、日光浴を楽しんでいた。

（ああ、もうだめだ。弁解がまるで思いつかねえ・・・）

「えーと・・」

（むづ正直に言おうーー）

「実はよお・・・」

「あー、やつこえぱー。」

健斗が大声を上げた。

「京谷さん車の鍵貸してください。」

「だから今からそれにつけて話をうと・・・・・

「違います。僕たちがのつてきた車のです。」

「お・・おひ」

小走りで走つていいく健斗。

戻ってきた健斗の手には大量の鍵が握られている。

「健斗！ナイスだぜ！」

「いやー京谷さんが投げ捨てたのを拾つてよかったです。後で戻そうと思つたんですけど、結局戻すのを忘れてそのまま出発してしまつて・・・・」

(健斗・・お前はやはり天使だ！異論は認めない！)

「じゃ・・・・じゃあ早速探すか。」につて合ひ鍵を

やはり時間がかかったが言つても数分程度だ。

「やつた——」

はやり一一番喜んだのは京谷。

運転するのが楽しみだったのだろう。

「エンジンをかけるぜー。」

「オオオオオ……

地面を揺さすような低いエンジン音が響く。

「ほえ～これがスポーツカーかすげえなー！」

「じゃあ私たちほいっしで進むから後から付いてきてね。」

「おつー。」

車屋を出た京谷たち。

京谷の友達の居場所を知らない美咲は京谷に電話をかけよつとあるが、電話番号を知らなかつた。

(なんてミスをツー)

「あーそうこえれば京谷さんの友達つてどこの住んでるんでしょうか？」

(よく気がついてくれたわー健斗)

「ちよつと待つててください。今聞きますから。」

「ピッ—

「—?」

(な・な・なぜ、なぜ健斗が京谷の電話番号を知つてんのよー? 私でも知りないのよ?)

「け・・健斗、いつ京谷の電話番号聞いたの?」

「警察署にいた時にふと思つて立つて聞きました。」

「ほかのみなさんの電話番号も入ってますよ。ほら」

(私は優華と悠樹以外は入ってない……)

「ま・・・まあいいわ。でも、場所はどこなのー。」

「? ? ?」

(なんか怒ってるような……)

「えーとにかく都市部へいらっしゃる際は三キロ進んだところにあるマ
ンションだそうです。」

「了解。大体の勘で案内するから迷つても勘弁してね。」

「いえ、その必要はないと……」

「どうして?」

「都市部なら京谷さんも知つてるそいつです。よく友達の家へ遊びに

行くから、だそうです。」

「だからこれからは俺が先を走るよ、だそうです。」

「わかったわ。」

ブウウウウウン・・・・

体に響くようなエンジン音が隣を走り抜けていった。

「あ、京谷さんが美咲さんに代われと・・・・

携帯を渡してくる健斗。

「もしもし?」

「悔しいか?」

軽く笑つて いるのが電話越しに分かる。

バギッ

今美咲が握力計を握つたら、男子に匹敵する、またはそれ以上の数値が叩きだされただろう。

「い・・いええ、別に私は困らないしー道がわからなくて困るのは運転している悠樹だしね！」

「ちなみに悠樹にはもう教えたぞ。」

また電話越しに聞こえてくるかすかな笑い声。

バギバギッ

美咲から表情が消え、携帯を握る力がさらに強くなる。

「ああ～僕の携帯が悲鳴を上げているー。」

健斗が強引に美咲から携帯を剥ぎ取る。

「京谷さん、すみません切れます！」

ブツッ

しばらくの沈黙。

「番号あげましょつか？京谷さんの。」

「ええ・・・あなたのもお願ひね・・・」

そして美咲が携帯の電話帳を見ながらニヤニヤしていると、前を走っていた京谷のスポーツカーがゆっくり減速し始めて、やがて止まった。

早速京谷に電話をかけてみる美咲。

「どうしたの？」

「ツチ！健斗か悠樹の野郎・・・もひひひと遊ばうと思つてたのに・・・」

「今はそんな」とはいいから一で、どうしたの？」

「前方に『アレ』の群れだ。」

「数は？」

「軽く百は超えてる。」

「なんで！？」

「近くの学校からだらつ・・・・・

「！・！・！」

「つてことは、全部生徒？・・・・・」

「先生も交じってるが九割が生徒だ。」

「そんな！」

大人だから大丈夫だつたというわけではないが、やはり子供相手だと若干の迷いが生まれてしまう。

「ちょっと携帯貸してもらえます？」

健斗が手を差し出す。

「ええ。」

「ありがとう」「ざいます。」

「では京谷さん。今から射撃を開始しますので僕たちの車の後ろへ隠れてください。」

なんかしらの返事をしたのが、京谷の車が動き出した。

「ちょッ！ ちょっとあんた！ 相手は子供よ？ 回り道をしたって……」

「もう「人間」じゃないんです！」

「そんなこと言つたつて……」

「大体大人の容姿をしてる「アレ」は散々殺してきたじゃないですか！」

「…………」

「生きるためなんです……許してください。」

健斗は京谷が自分たちの車の後ろにスポーツカーを止めたのを確認すると、銃座につき始めた。

「いきます……」

ダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダ
・・・・
ズシャズシャズシャズシャ・・・・・・

車の中にいても、銃声に交じつて体が弾け飛ぶ音がする。

また、「アレ」が集まっていたということもあって、前にいた「アレ」に撃ち込んだ弾が貫通し、後ろの「アレ」にもダメージを与えていた。

数分後・・・・・

「終わりました。」

道路はたくさんの肉片と血が溢れていた。

「つづー」

口を押さえる美咲。

これが普通の反応といつものだ。

しかし京谷は「アレ」が消えたことを確認すると、美咲たちの車の後ろから出て、まだ形が残ってる子供の体を踏みつぶしながら進み始めた。

血脂でのスリップを恐れているのか、スピードはそこまで出ていない。さすがにその光景と、踏みつぶす音には美咲以外の四人も寒気を感じた。

「　　・　・　・　・　・　・　・　・

そして悠樹もゅつくりとアクセルを踏み始めた。

じつしてまた一つ試練を乗り越えた京谷たちは、先に進む。

屍を越えて（前書き）

お気に入り登録してくださった方ありがとうございます！
これからも何卒よろしくお願ひいたします。

屍を越えて

子供たち（「アレ」になつてしまつた子供だが……）を大虐殺してから、早くも數十分経つていた。

しかし美咲はまだ軽く震えていた。

ほか三人はもう気持ちの整理がついたのかまつすぐ前を向いていた。だが、車内の空気はどんよりとしたままだ。

それでもなお京谷の車は進み続ける。

（早くこの車から出たい……）

健斗の思いは神が叶えてくれたが如く、すぐに叶った。京谷が止まったのは大きなマンションの前。そして車から京谷が出てくる。

（やつと出れるー）

健斗は勢いよく車から飛び出す。

「一・二・」

健斗は車から出でてすぐに異変に気がついた。

「なんだこのにおいー!？」

なんと表現すればいいだろうか？

血脂と内臓などが混じった、生臭くて鉄っぽい臭い。

そして健斗は振り返って車を見た直後に道に吐瀉物をまき散らした。なぜなら、車両には血は勿論のことタイヤのホイールにはどうやらしてそこに付いたかわからないが、腸のようなものが付いていた。他にも車のいたるところに臓器がへばりついていた。

流石に銃を撃っていた健斗でも、まじかで内臓を見るのは慣れていなかつた。

「「ホッ！」「ホッ！み・・・美咲さん！優華さん！あなたたちは出ない方がいい！」

「「うーな・・・なんだよこれ・・・・」

悠樹は運転席から出てきてすぐ口を塞ぐ。

「どうしたのよ・・・?それになんなのこの臭い?すごい嫌な匂いなんだけど・・・」

美咲が訝しげな表情で聞いてくる。

「待つて…今回だけは僕の呪つことを聞いてもらひませんか…」

「え？ いっけど…」

「じゃあこいで待つててください…できれば銃座で見張つてもうえるとうれしいです。」

「わかったわ。」

と言い残して健斗と悠樹は京谷の元へ走る。

「あよ…京谷さん…こいら辺に水とかはありませんか？ 大量のです！」

「友達の家に行けばあるだろ？ が、いちいちバケツに入れなきゃ持つてこれねえな。」

「後でガソリンスタンドに寄るからその時に洗車でもすつか。」

「あれ？ 僕が何を言おつとしてるか分かるんですか？」

「あれを洗い流したいんだろ？ 」

京谷が指差すのは僕たちが乗ってきた車だ。

京谷の指の動きにつられて健斗と悠樹はまたあれを見てしまつ。

しかし、前から見た車はもっとひどかった。

ありとあらゆる隙間に血や臓器が詰まつており、まるで神輿のよう

に腸や小さい指がぶら下がつている。

この車が神輿だとしたら、ここまで神を愚弄した神輿はないだろ？

「ウツ！」「バアー！」「ホツ！」「ホツ！」

さすがに悠樹も耐えられなかつたようだ。
とこゝよりは、耐えられる方がおかしい。

「京谷さんは大丈夫なんですか？」

「全然大丈夫じゃない……」

みてみると若干顔が青ざめている。
手も若干震えているようだ。

「いや～ほんと耐えるのがつれーわ…………」

「せつせと要件すましてガソリンスタンドに行かなきゃな。」

「京谷さん、なんでそんな軽いノリなんですか？」

「いやでもしないと平常心を保つてられねえんだよ……」「とにかく今はいち早く俺の友達救つてさっさとこいを離れよう。」

「……了解！」

「うッ！」

「おいおい大丈夫か悠樹、なんならここで待つてもいいぞ？」

「もつとつらいですよ~」

久々に三人の顔に笑みがよみがえる。

（（（早くこの状況を打破しないと）））

決意を固める三人は真剣な面持ちでマンションへと入つて行く。

屍を越えて（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございました！

失ったもの（前書き）

いや一段々話のストックがなくなりてきて、あたふたし始めました
＾＾；

ですが、まだやめるつもりはないのでどうかこれからもよろしくお願
願いいたします。

ただ、投稿間隔がだんだん広くなつていくかもしません・・・

失ったもの

あれからマンションの中を軽く歩いてみたが中は綺麗なままで、「アレ」が入ってきた形跡は全くと言つていいほどない。

「何階に住んでこられたですか?」

「七階だ。七階の一一番端に住んでいますよ。」

「じゃあHレベーターで行きましょうか。」

「ああ。」

Hレベーターに入る京谷たち。

健斗は静かに七階のボタンを押し、悠樹は銃の弾薬確認などをを行つている。

京谷は心ここに在らずとつた表情で、前をじっと見つめている。

(やつぱり心配なんだらなあー)

Hレベーターの扉が開いた。
もう着いたようだ。

「……いくぞ。」

「「」解」

「シ ハシ ハシ」

歩く音が静かな廊下に響き渡る。

「ううだ。」

ここもいたつて綺麗なままだつた。

しかし少し不自然なのは、靴が挟まって少し開いている扉から鉄の臭いがすることだ。

「行くぞ。」

京谷がいつにもなくまじめな表情になる。
扉はチエーンもかかっていなかつたのか、何の抵抗もなく開いた。

「ううー。」

悠樹がまた口を押さえる。

「なんですかこれー?」

健斗が聞いたのは玄関に転がってる女の頭のことだ。

「和哉の母さん・・・・・・」

「和哉つて京谷さんの友達のことですか?」

「ああ。」

「でもどひこー!」「アレ」が侵入してきた形跡はなかつたのにー!」

「わからないー!」

「とにかくいまは和哉を探すぞー!」

「はいー!」

「まひ、悠樹も行くぞー!」

「うッ！は・・・はい・・・・

家に入ると頭の近くに胴体が置いてある」と気付いた。

「おい！和哉、いねえのか！」

すると風呂場から小さな声が聞こえた。

「・・・・・うん・・・・・じや・・・・い・・俺は・・・・・

「いのんだな和哉！今行くからな！」

すると突然大きな声が聞こえてきた。

「来るなよーい・・今ちょっと手が離せないんだ。」

「勝手に言つてみ。」

京谷は風呂場まで行つて、扉を勢い良く開ける。

「血なんか流してどうするんだ?」

「エーハルヒーでお前!俺は殺しちまつたんだよ、しかも自分の胸を
んをなあー。」

「エーハルヒー突然襲い掛かってきたから必戦したんだろ?」

「ー?」

「わ・・・わかるのか?」

「今じゃ何が何だか分からぬんだよ!起きたんだよ。」

「エーハルヒーお俺は悪くないんだなー。なあ?」

「ここからいつか行くべー。」

「おひーあつがとよ、京谷ー。」

ヒカルで健斗が氣付いた。

「和哉さん・・・でいいんですね?」

「ああ、やうだが?」

「その傷、何処でつけたんですか?」

「ああこれか?」

それは腕についている血が滲んでいる包帯のことだ。
血が滲むほどなので、かなりの出血量だと思つ。

「話を戻しちまうがわつと母さんが襲つてきたって言つたら? その時母さんが噛みついてきてな、少し肉がえぐれちまた。つたくてえにもほびがあるぜ。」

「――――――」

三人が黙りこむ。

京谷は愕然として床に崩れ落ちる。

「おいへ~どうしたんだ? さあ、いいひ~ゼー! 僕もここんところいち早く
出たいからな。」

「 「・・・・・」

「 和哉・・・・・」

「 ??」

「お前母さんみたくなつて俺たちに殺されると、人としての意識を持ったまま殺されるのどっちがいい?・・・・・」

「はあ?笑えねえよ・・・なんだよ母さんみたくつて?」

「お前嘘まれたんだる?」「アレ」になつた母さん・・・・・

「おいでー!」「アレ」つむなんだよ!」

京谷は今まで起じつたことをできるだけ短くして伝えた。

「そ・・・・そんな・・・・・。じゃあ俺もお前の敵になるつてのか!」

「?」

「…………」

「何とか言えよー。」

「で、どうがいい?」

「何がだよー。」

「やつらの質問だ。」

「おこ・・・マジでやる気かよ・・・」

「ならいいじつとしてこればいい。ただ俺たちはお前を連れてはいけない・・・」

「何なんだよー!せつと希望が見えたと思えばすぐに地獄かよー!こんなんだつたら・・・」

「!!--ゴフツ!!--」

「ゴハ!-ゴホツ!-ゴホツ!-」

和哉が床に血をまき散らす。

()(これが初期症状なのか……)

「どうする？」

「つづりー・マジかよ……せつかく生を延びられると思つたのに元の元の

「…………」

「わかつたよ。俺は置いていってくれ…………」

「ツチー。」

京谷は苦笑の表情を浮かべる。

「ははー! んだよ、その面は? お前が言つたんだぞ。家に残るか、殺されるか、ってな。」

「…………」

「それならおれは遠慮なく残りの少ない余生を楽しむよ・・・あ
・メールでも来てねえかな・・・・」

「・・・・・・・・・・・・」

「なんだよ？わざと行けよ。俺はもうやつへつ過いしてえんがつ
て言つたひつ」

「わかつた・・・・・」

「もう少し前と遊びたかったよ・・・・・」

「・・・・・・・」

そして三人は和哉の家を後にした。
和哉のその後は言つまでもないだろ？
そして京谷たちは和哉の家を後にした・・・・

「へやツー！」

「ドンッ！」

Hレベーターの壁を殴る京谷。

「京谷さん・・・・・」

「わかつてぬーでもよ、なんどよつによつて和哉なんだよー。」

「・・・・・・・・・・」

「京谷さん・・・・・

「ああ?」

ドガッ

京谷の顔面に何か固いものがめり込む。
健斗のグーパンチだ。

「あなたはリーダーなんですよー。リーダーがこんなんだつたらいざ
れチーム内の秩序は崩れますー。」

「・・・・・」

「全員あなたを必要としてるんですよー。」

しばりくの沈黙

「確かめてみる・・・・・」

携帯を取り出しじ「かに掛ける京谷。

「もしもし？俺だ。美咲、お前は俺が必要か？」

数秒後・・・・・

「いらっしゃってよ・・・・・」

「うひょッ！僕には必要なんですよ！頼もしいリーダーが！」

すると突然京谷の表情が明るくなつた。

「なんてな、俺がくよくよしてたら黙だよなーお前の殴りのおかげで田が覚めた気がするぜ。」

「京谷さん……」

「だから俺もお前が血迷った時は顎が外れるほどのパンチ叩きこんでやるからな。」

「そんなことしたら一生の眠りについてしまいますよー。」

「「まはまはまはー。」」

明るくなつたエレベータ内。
そして話の輪に入れない悠樹。

(俺つて・・・空氣みたいだな・・・)

ついで京谷たちはマンションを後にした。
もしかしたらマンションに入る時よりも出てくるときの方が明るい
表情になつていたかもしれない。
友を失つた京谷が次に向かう場所は・・・

上野のパン屋さん（福島）

「いつもおはようございます、こんばんわ、こんばんわー！
ちよつと遅くなつちゃいましたへへ；
理由は簡単でテストが近いからです。
まあ勉強はしないんですけどねw
とにかく遅れすみません。
でね、じゅうぶん覗くだれこ。

止まるひはできない

「マンションから出て美咲たちに手を振る京谷。それを見て美咲たちも手を振り返していく。

これはただの仲良しじつこではなく、ただ単に叫ぶと「アレ」が寄つてくるのでジェスチャーで無事を報告することにしたからだ。

「京谷・・・・・残念ね・・・」

「なぜわかった?」

「だつて、京谷が救えない人なんてすでに死んでいる人かもう死んでしまいそつな人ぐらいでしょ?」

「あいつはまだ元気だつた・・・・・血を吐いてもまだ笑顔でじつちを見てやがったッ!」

「京谷さん、忘れたんですか?」

健斗が京谷を落ち着かせる。

「す・・・・すまない。」

「俺はあっけに乘るから悠樹、頼んだぞ。」

スポーツカーに向かつて歩き始める京谷。

「別にもう人は乗せないんだしここに乗つてもよかつたんじゃない？」

「分かつてないなあ～」

健斗と悠樹が軽蔑の眼で美咲を睨みつける。

「ま・・まあいいわ。さあ、早く車に乗つて。」

全員乗ると美咲がどこかに電話を掛けようとしていた。

「どこに掛けるんですか？」

「あまつてゐるじゃない、リーダーに今後の活動について伺おうと思つてね。」「…………あーもしもしへーこれから一体どうあるの~」

「うん。…………」「…………」

京谷が言つたことほこりだ。

まずもう友達救出は行わないといつと。

これは京谷が和哉を救えなかつたからやらないのでなく、単純に生き残るためにこれ以上危険を冒したくないからである。

そして新たな目標は、自分たちの基地みたいなものを入手するということだ。

「えー？ それって私たちの新しい居場所を見つけるってこと？」

「ああそうだ。」

「それで候補地として今のところ前に行つたことのあるあの大きいホームセンターなんてどうかなーと思つんだがどうだ？」

「いいと思つけど、いずれ食料とかも切れるんじゃないの？」

「そんな時は調達しに行けばいいだろ。」

「うへん……」

「まああとりあえず行つてみよつぜーなあ？」

「わかつたわ。悠樹にはホームセンターに行つてもらえばいいのね

?

「ああ。」

「じゃあね。」

۱۰۷

「じゃあ悠樹、頼めるかしら？」

「話は大体聞いたから道案内だけ頼めるか?」

「そこら辺の詳しい道は知らないけど、私が住んでいた地区まで近付いたら案内するわ。」

「じゃあ一度優華さんの家まで行けばいいんだな?」

「ええ、そうね。」

「じゃあ行くかな！」

「ええー。」

アクセルを踏み込む悠樹と京谷。

目指すはホームセンター、しかし詳しい道は美咲がよく覚えているので一度優華の家へと向かう。

果たして京谷たちは今日中にホームセンターに着けるのか・・・・・

上あるじよせやない（後書き）

読んでくださった方ありがとうございます！
あと、お気に入り登録してくださった方々！
本当にありがとうございます！

拠点（前書き）

突然ですが、ツイッター始めました！

ということで感想などが送れない人はツイッターなどで「感想をdmしてくださるとうれしいです^_^」

なんか知りませんが、設定はきちんとしたんですが、乾燥が未だに来ないんです・・・

なのでご感想がある方はツイッターまで。

k i h a r a 1-1で探すと出ると思います^_^
でわいゆつくりー覗ください

あれから數十分車を走らせているが、まだ優華の家は見えてこない。

「ねえ？まだ着かないの？」

「後ちよつとだから待ってねー。」

「うーーーーーだつてかれこれ十分以上は移動してることうして。
・
・
・

「あのときは京谷さんはかなりスピード出していたからあんなに早く
移動できただけで、安全運転の俺じゃあ十分以上はかかるのー。」

「じゃあ早くしなさいよー。」

「事故つたらどうすんだよー。」

～～～

そんな言い争いをしていると美咲の携帯が鳴った。
京谷からだ。

「むじむじゅ~」

「おせえ んだよ・・・」

ブツツ

それだけ言つと京谷は電話を切つてしまつた。

「・・・・・・・ 置い。」

「なにが!-?」

「京谷が遅いってよ。」

「えー、京谷さんが?・・・わかつたよ。速くすればいいんだ?」

「まつたく・・・・なんで私の言ひ方とは聞かないのに京谷の言ひ方とは聞くのかしり・・・・」

「つむか健斗と優華はよくこんな時に寝れるわね・・・・私たち結構つむかかったと思うんだけど・・・・まあいいか。」

それから数分後・・・・・

「お～！なんか懐かしく感じるわー。」

優華が元気に声を上げる。

その声で健斗も田を覚ます。

「・・・・ん～もう着いたんですか？」

「ああ。」

「いいからなら私も道案内ができるから、安心してー。」

(といつよつ京谷だつて近くに住んでこらはすあなたのじぶんして地理に詳しくないのかしら？)

～～～

するとまた美咲の携帯が鳴った。

「もしもし？」

「こまさい向だけど～ホームセンターまで行くより優華さんの家に立て籠もればいいんじゃね？」

盲点だった。

「確かにね、セキュリティーもしかつりしてることになったら非常用の発電機でも作動しそうなくらい豪華な家だしね。」

「だろー・ちょっと優華さんに聞いてみてくれないか?」これを拠点にしてもいいか?、つて。」

「うん!分かったわ。」

ブツツ

そして優華に事情を話す美咲。

「ああ～確かにね。自分で言ひのよちとおかしいけど私の家はセキュリティーも万全だし、食料、水、衣類は備蓄があるし、京谷君の言ひとおり非常用の発電機もあるわ。」

「なら決まりね！」

こうしていとも簡単に拠点を手に入れた京谷たちは早速優華さんの家へと入つて行つた。

ちなみに時間はまだ午前十一時十三分だ。

拠点（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1085z/>

パンデミック（完全版）

2011年12月17日21時50分発行